

4N72

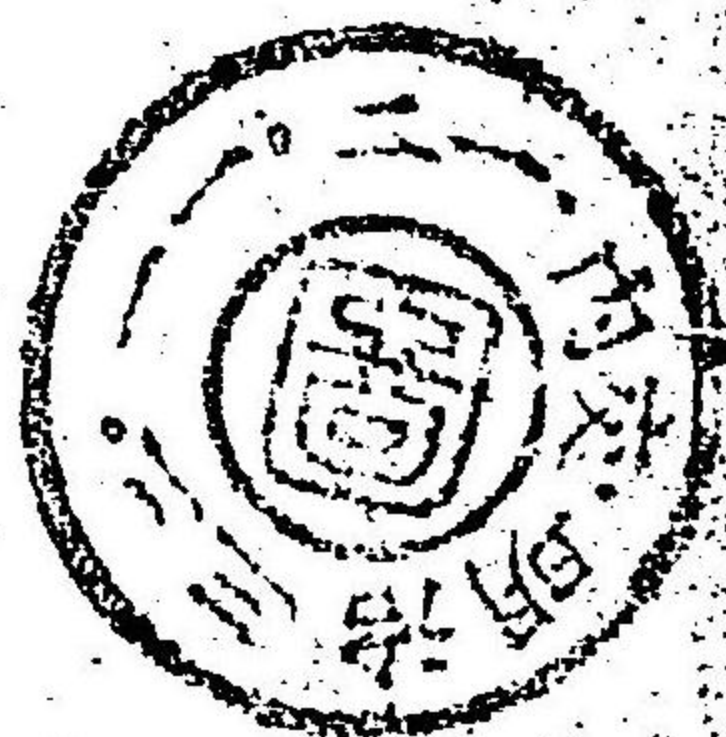


兒童研究文庫

第一編

兒童觀察錄及其批評

スナイデマン氏





序 文

現今科學界に於て重要な位地を占め、將來益々隆盛の域に進まんとするの傾向あるものは兒童の研究なりとす。而してこの兒童心理學の創唱者とも云ふべきは「デイー・トリッヒ、デイー・デマン」の二人なり。氏は千七百四十八年四月三日獨逸國プレーメンの近傍に生れ、修學の後學者として名譽ある位地に進みたるが、千八百六十年に至りてマルブルグに於て哲學教授となり、その死期に至るまでこの職に従事せり。即ち氏は遂に千八百〇三年五月二十四日を以てこの地に歿せり。氏はその子の發達を攻究し遂に觀察録を公けに



したり。かくて「テイーデマン」氏の児童観察誌は千八百六十三年「ミスタン」によりて佛國の教育公報にあらはれ、次て千八百八十一年佛國の児童心理學者「ペレ」が「テイリー、テイーデマン及び児童學」と題して「テイーデマン」氏の觀察を引用し之が批評を添入せり。而してこの二書は児童に關する幾多の著述中殊に歴史的價値を有するを以て名あり。今この二書を譯述して我が國に於ける児童研究に熱心なる人士の參考に供す。

明治三十二年十月

教育研究所 識

### 「テイーデマン」氏児童觀察錄

教育研究所 譯

#### 兒 童 觀 察 錄

(一) 凡そ經驗及び練習は、吾人をして感官を用ひて正しく感ずることを知らしむるものなるをば、「ち」にせるでん氏のなせる盲人の實驗によりて證明せらるゝ所なり。又森林の中にありて動物とともに言語を用ひずして生活せる人間を觀察するに、精神作用は次第に複雑に發達するものなることを知るを得たり。然れども精神作用の發達を知らしむる所の心理學の部分は、教育の方法及び精神に關する正確なる知識に向つて必用なるにも拘はらず、僅かに攻究せられたるのみ。然る所以のものは疑もなく兒童の精神に關して、精密にして、且つ充分なる多數の觀察に乏しきが故なりとす。之に就きて余は自ら觀察するの機會



(三)

を得たる所のものを叙述せんと欲す。これ余が自ら之れを以て完全にして充分なるものなりとなすものにあらず。然れども余は自ら茲に實例を示し、以て鋭敏なる而かも注意深き観察者をして、彼等の観察の報道及び余の観察の是正を請はんとするにあり。兒童の精神に就きては世上往々知識を有するものありて、その知識を整理すれば廣くこれを公けにするを得べく、又一つの科學となし得べきものあるも、有識者は未だ充分にその尊重すべきものなるを知らず。又これを公けに示すを以て重要なりとなさざるは遺憾なり。

余がこれより記述せんと欲する兒童は千七百八十一年八月二十三日を以て生る。かく出生の時期を注意する所以のものは、發達の進行に於て時日の確定に關係あるもの甚だ多く、加ふるに從來人の能く観察せざりし所なるを以てなり。而して大人に於るが如く、兒童に於ても或る者はその進歩速かにして、あるものはその進歩遅きが故に、一般普

兒 童 觀 察 錄

通の法則は認め難しと雖ども、なるべく速かにある一つの法則を發見し且從來全く不定の事項に多少の規定をなすを得べし。この點に就きて數多の觀察を蒐集し、以てこれを比較すれば通常の自然的發達に向つて平均の結果を發見するを得べきなり。

兒 童 觀 察 錄

兒童の覺醒するときは常に目を光線の方に轉ずることあるは明かなり。これ光線は愉快なる印象を興ふるものなることを證するに足らん。成人にありては習慣により又は他の活潑なる刺戟あるが爲にこの印象を知覺せしめざるが故に、通常これを感じざれども、暗淡たる天の黒雲より發射する所の光線が心に興ふる活動に注意するときの如きは、これを認め得べし。又翌日侍婢が小兒の口中に指を入れしに、長くこれを吸ふことなかりしもこれを嘗めたり。然るに小なる布片をとりてその中に甘きものを包み、これを口中に入れしに小兒は永くこれを吸へり。されば吸收作用は本來より存するものにあらずして、

(三)



(四)

經驗によりて知るものなることを證し得べし。物を嘗めることに就きて最初唇の運動は腺に於る刺戟と結合したる飢渴の情よりして外物によりて起されたる口の器械的運動なり。これは吸収作用にあらず。然れども舌の運動によりて新たなる感覺を起し、以前の煩はしき勞力を減せしと感ずるに至りて、舌の運動は益々強くなり、嘗むる所の作用は通常の吸収作用に變し、これと同時に器官は次第に發達して吸収作用が要する所の状態をとるに至るなり。下に記する所は能くこれを證明するに足らむ。若し兒童が吸収作用を初むるに先立て、飲料によりて飢渴を満足せしむれば、その後は小兒は吸収作用をなさざるべく、而してこれを哺乳せしむることも困難なり。これ小兒が唇及び舌を適當に用ゆることを知らざると、空腹の場合に唇舌の必要を感ぜず。他の方法によりて欠乏を満足することを得れば、なほ便利なる方法を用ゐんどもせざるに基つくものならむ。

兒 童 觀 察 錄

兒 童 觀 察 錄

(五)

眼はすべてのものに向つて動かさるれども不定と云ふにはあらず。而してその對象を求むるものゝ如し。最初に注目するものは運動する所の物体なりとす。凡て運動する所の物体は變化及び變形の系列を生ずるが故に、大に感官を働かしめ、感覺的なる人間にとりては多くの娛樂を與ふるものなり。されば反省と、顧慮とによりて靜止せる物体中に自動的活動のあることを發見するに至る迄は、靜止せる物体を注視すること少なし。されば自然に兒童の精神の注意を惹くものは運動する所の物体なりと云はざるを得ず。思ふに人間の性格は既に兒童の精神中に存するものなるべし。動物は他の快樂を發見すること能はずして、常に彼等の物質的の欠乏を満足せしむるものに注意す。されば動物が肉体上の必要に關係なきものを永く注視するが如きことなきなり。これに反して人間は高尚なる見識を備ふるを以て、初より肉体上の欠乏を顧るをなく、その觀念を廣めんとを求め、而して肉体



(六)

的慾望に關係なきものに於てその作業を見出さんとする。これらの作業を求めんとするの根據は間斷なき作用を求め、物質的缺乏を満足せる後は進んでこれに従事せんとする所の高尚なる活動性及び活潑なる自動性に基つくに外ならざるなり。

小兒は自由を喜び若し自己を拘束するものあれば之を不快とし、故意に之に反抗せんとす。然して苦痛の感覺あるもの、外は四肢の運動はすべて故意に出づるものなく、無意無心に不安なる自体を動かすなり。此の如くにして身体の運動は概して苦痛の感を緩和ならしむるものなり。何んとなれば運動に依て苦痛の感覺よりして注意を轉ぜしむるを得ればなり。又吾人は烈しき苦痛を感じる時は、身体の機制上に抵抗すべからざる運動の衝動起るものにして、其機制に従て苦痛あるときには、兒童は知らず、身体を動かすことあり。されば一部分はこの理由により、一部分は運動が作業と娛樂とを生ずるによりて、

兒 童 觀 察 錄

兒童は身体の自由なるを好み、衣服に巻き込まれるを厭ふなり。苦痛の外に身体を本能的に動かすべき他の原因あり。即ち或る所に於ける血液及び液汁の滯積液汁の循環よきこと并に或部分の特別なる刺激是なり此等の者は皆總ての漠然たる感覺及び無意的勞力を鼓舞して、以て身体を運動せしむるものなり。

兒 童 觀 察 錄

(七)

此時代に於てすべて兒童の運動は全く無意的なるや。或は既に其運動中には意見及び習得したる智識の混するものなるや。余は惟ふに、既に多少の經驗的智識の加はりたるものあるを證明すべき事情ありて存すとす。先の理由に據り母親が未だ兒童に哺乳する能はざるに當り飲料を以て之に慣れしめんとはせず。故に兒童は食物の缺乏を忍はざるを得ず。而かも兒童の健全なる場合に於ては空腹を堪へざる可からず。是に於てか此の感を緩和ならしめんとして自己の指を口中に入れて之を吸はんとし、又は屢々他人の指を以てして多少の緩



(八)

和を得るとあれども、遂に勞して功なきことを認むるに至る可し。余を以て之を見れば、こゝに兒童の行爲には明かに習得せしところのものどある故意なる所のものありとす。兒童は既に經驗によりて、口中に或物を入れられたる時は、是を以て飢渴の感は弱めらるゝものなることを明かに知り、この二觀念が既に互に聯合す。又彼は身体に於て飢渴を感ずる所を差別することを得。この點に向つてその手を動かさんとす。然れども、面前の事物に明瞭なる表象を欠き、且つ手腕の運動に於ける經驗に乏しきが故に、確然とその局所を見出し難きなり。實に小兒は故意に或者を把捉せんとすることなし。若し把捉することあるも、是實に本能的機制に従ふものにして、恰も感覺ある植物の葉、或は花の如く、外物が内部に刺戟を與ふるときは本能的機制に従て其指を收縮せしむるのみ。

癢覺は存することなく、柔かに足に觸るゝときは足を引き退くると雖

兒 童 觀 察 錄

兒 童 觀 察 錄

(九)

も笑の容貌を示すことなし。さればとて眼邊又は口の收縮により苦痛或は快樂のある特殊の種類に關係あるものを表示することなし。斯くして猶未だ印象を判別することなく、總ての者は快不快の種類の格段なる判別なく、單に或る反撥の性質を備ふる印象となるのみ。第一に判別を要す可き味覺の特殊の種類すら猶未だ知られず、況んや嗅覺に於てれや。此ことは八月二十五日に於て證明せられたり。偶小兒が少しく病ありし爲めに、快からざる強き香ある藥劑を與へたるに、小兒は通例の滋養物の如く、全く嫌厭の様子なくして之を飲み。是に由て之を觀れば、吾人が簡單に、且つ最も容易に判別する感覺すらも、兒童が差別し、又は確定し得るに至るまでに練習と比較とを要するなり。

八月二十八日、笑の容貌を呈せり。されど是れ特別の動機あるにあらず。又多分は意見の存するにあらず。又愉快の感情に基づくにあら



ず。當偶然機制の然からしめたるものなり。總て小兒は屢々睡眠中に、或は睡らんとする時に當て、この相貌を示すものにして思想又は感情ありて之をなすにあらざるなり。又睡眠中の小兒は夢みたるか。思ふに多分は夢みることなけれども、ある物体の刺戟に感ぜしもの、如くに屢々他の運動をなし、又は音聲を發することあり。而して官的聯想さへも後日に起るものなれば、余は少なくとも、現在其處に存せざる物体の觀念が存在することを斷定すべきものあるを認めず。即ち當時果して夢あるものとは斷定し難きなり。然れども侍婢、乳母、母親は通常之を夢となす。是れ全く機械的作用と精神作用とを區別せずして、彼等は之に類似したるを以て之れを夢なりとなし、又大人にありては夢より起るものなるを以て之れを夢に歸せんとするものなり。

九月五日、即ち出生后十三日に於て、小兒は明瞭に既に學ひ得たる表象

并に精神の感情を示したり。この時に於て明確なる抵抗をなし、ある藥劑を服するを好まず。再び之を吐出せり。而して初めて試みられたるものにありては、然らざれども、曾て再三味ひたるものに在ては皆之を吐出したり。今や藥劑の味と常の滋養物の味とを區別し、又恐らくは香により、又は通常與へらるゝものと異なるによりて、不快なるものか、或は滋養物が得らる可きものなるかを識別し得るに至れり。然れどもその判別が猶確實ならざるときは、反抗することなくして醫藥を取れり。嘗て眼は何事も示すことなく、口は泣くことの外に動くをなかりしが、今は眼及び容貌によりて苦痛及び快樂の表出をなすを見る。曩には各物皆同様に注目せられたるに、今や彼に對して談話するもの、態度を特に注視することを知るへく、且亦泣叫して告ぐる所あらんとするを見るへし。曾て苦痛に泣きしも、今や不便を感ずるときには厚遇を得んとして泣くなり。このときに於て以上の事實により



(二一)

て集合的表象、他物と自己に似たる人類との區別、感覺の精密なる區別等あること明かなり。通俗にては小兒の出生後三ヶ月間を愚鈍の時期と稱すれども、以上論ずる所に從て、吾人々間の感覺及び表象の最も明瞭なる痕跡をあらはすものなりとするは正當なりとす。然して若しこの時期以前には是に就て注意せらるべきもの一もあるなしとせば、これ正當なる見解となすべからず。

九月十日に以上の事項は、ある新たななる事情の下に愈確定せられたり。小兒の泣くときに當り、乳を吸ひ得るが如き位置に於て抱くか、若しくは顔に柔かき手の觸るゝことあらば、泣叫を止めて胸を探り、乳を吸はんとするが如し。こゝに觀念聯合作用の存すること明かにして、是れ特別の位置の感情或は柔かき手の感情、吸收作用及び胸の觀念を喚起するならむ。故に彼は既に確然たる觀念を構成せるを見る。詳言すれば印象の痕跡を蓄積し、感官原因に依て之を改造し、内面的精神の

兒 童 觀 察 錄

兒 童 觀 察 錄

(三一)

力によりて再び觀念となすことを得るなり。故に種々の感官的印象を辨別し、分離して感ずるなり。然れども自己の身軀及び遠距離の物の觀念は、一部分は不完全にして一部分は全く是を欠けり。此を實際に徴するに暫時手を自由になし置くときは、小兒は苦痛を覺ゆるまでも其手を以て自身を打ち、又は抓き、自体と外物とを識別せざるのみならず、体の各部を識別せず。以て其表象の不完全なるを知るべし。又遠距離は全く之を認知せず、若し之を知るを得ば尙數度の試験の後に在て顔を打つことなかるべきに。其然らざるを以て見れば、表象の全く欠損すること明かなり。又自己の四肢を支配し得ず。況して運動に應じて力を出すことを知らざるは前同様なり。手の運動に就きて觀察するに空腹の感より手を吸はんとして口中に入るゝことあり。これ機械的刺戟に或る觀念聯合の作用加はりてなる有意的作用なれども、是を除きては他に有意的作用あるなし。抑も最初の身体運動は



單に物質の刺戟によりて起れる機械的のものにして之に由て四肢の運動の觀念を得。而して觀念聯合作用の助けによりて有意的運動をなさんとする慾望を生ずるなり。かくて經驗は運動に種々の種類あるを知らしめ、又必要なる四肢に力を與ふることを知らしめ、之に始めて意の向ふ所に適當に各肢を動かし得るなり。

全月二十八日最早舊の如く屢々手を以て打ち又は擦くことなきを見る。而して苦痛を與へ且つ屢々抵抗する所の經驗に由て自己と外物との區別を知り、又稍距離をも知るに至れり。斯様なることは曾てちええでん氏が盲人に就きて觀察し得たる所を確かむるものなり。

即ち萬象眼中に映するとも唯視覺のみに由て距離を知る能はず。遠距離及び自己以外に存在する物の印象を得んには之に加ふるに觸覺なかるべからざることを實證するなり。然れども何故に遠距離の智識及び手の用法か尙早く識られざるかを疑ふなり。蓋しこれ手の運

動によりて、自体及び体外の物体に於ける表象の喚起せらるべきも、始めに兒童の手を衣服を以て巻き込みたるが故に、その運動を妨碍せしや疑ひなし。而して今や睡眠は漸く減するを認むべし。最初健全なる兒童に在ては、終日熟睡して脛空腹なるに至て覺醒するなり。然るに漸々睡眠は減少して遂に睡らしめんとするも、なほ是を好まざるに至る。是何故なるか。脛身体上の原因に基つくか。將た又精神の大なる活動に據るか。惟ふに恐らくは身体上の原因に依るものにはあらざるべし。例へば動物か食物を飽食して飢渴のため敢て働くことを要せざる時は終日睡を貪るなり。其他活潑なる犬も肉慾に不足なきときはその所に安ず。籠鳥は睡らざるが是れ蓋し食物を探ること極少量宛にして満足せしむるに足らざるのみならず、消化作用殊に迅速なればなり。大人又は小兒に在ては即ち然らず。一度食すれば數時間は満足することを得るなり。されば斯く睡眠時間の減少するは



全く精神に於て優ぐるゝ所あるによる。幼稚なる精神に種々の觀念を蒐集するに従て精神益活動す。精神活動すれば身体を安することと尠し。これ實に人間精神の本來より大活動力を有するの證ならずや。今や小兒が微笑するを見るへく、而して或は話をしかけ、或は擬態を示すときは小兒は微笑を催すに至る。然れども斯く微笑せしむる所以のものは抑も何に基づくものなるや、確定せざるなり。是單に運動の變化と複雑とによるか。或は同情の始を示すものか。或は意外の身振に感じたるためか。抑も亦此等總ての事項を合して起れるか。之れに就きて尠なからざる部分を占むるものは下に記述する所によりて確實なるへし。人あり。小兒に向て話しかくる時は小兒も亦簡單にして且つ分明ならざる音聲を以て、他の聲に應じて、かはる、かはる、發音せんとす。この摸倣は早く發達するものにして、其根本的基礎は身体の機制に在りて、之を助くるに觀念聯合を以てするなり。吾人も大

に活潑なるものに感じ、他者の運動に専心注意する時は、吾人の力に従て、自らこれを摸倣せざるを得ざるなり。かくして其刺戟甚だ強くして之を行はざる可らざるに至る。而して之に反抗する甚だ難けれども、反省作用によりて之を抑止せざるべからず、これ一は其軀制に基きて活潑なる表象を作る所の器官は事を處する爲に正に其の在るべき位置に在りて表象を作り。一は觀念聯合によりて行爲の表象は直接に行爲を伴ひ且つ行爲の始原となるによる。この二原因より既に音を發することを知り、且つ發音器官を動かすことを知る所の兒童は、知らずくゝ音を摸倣せんとするなり。之に加ふるに同情の根源も亦こゝに存す。抑もある感覺を有するものを直覺し、自己か會てかく感じたる有様に、自己の精神を置きかへて、前の感覺を自らこゝに再現す。故に小兒が既に快不快の感覺に就きて多少の觀念を有すれば、(今他の擬態を察し得ざるとすれども或は又知り得たりとするも他人の睦ま



じき擬態を見る時には微笑を催すなり。何となれば他の容態を見て自己を、その感覺の地位に轉置するを以てなり。かく擬態と感覺とは自然的關係を有するものなり。されば感覺は常にこの擬態に隨伴するが故に、曩にその擬態を特に知ることなくとも、曾て感覺又は感覺に類似したる事柄あれば、擬態に隨ひたる感覺を發生せしむるものなり。されば擬態に急激の變化あらば、微笑にも亦これに應じて變化あり。小兒は最初すべて俄然たる意外の變化あれば、譬令その事項の笑ふべきことにあらざるも、微笑するなり。これ雷意外の事は恐怖を離れて特に愉快なる印象を與ふる證據なり。今や諸感覺は完全に、且つ確實に判別せらるゝなり。特に味覺に於て辨別あるを見るなり。十月二日には藥劑を服するに當り、顯然たる反抗を示せり。又始めて或者を掴まんとて、其方に手を延し全身を曲げんとつとめたり。依て自体と自体以外の者とを判別するものなるや

明かなり。されども小兒は物を握るに當り、適當に指を用ゆることを知らざるなり。譬令物を握ることあるも、それは正當に故意を以てするにわらずして偶然に出づるなり。何となれば握り得るが如く指の間に物の來りたればなり。斯くして、吾人には最も容易にして、殆んど性來のものゝ如く思はるゝ所の運動すらも、幾多の演習と無効の試験を要せしかを知るに足らむ。今や感覺よりして表象を作らんとする所の精神作用は更に明にあらはれたり。先には新たなるものに逢へば、速に甲より乙に轉じ、永くあるものを注視せざりしも、長く之に注目し、其對象の影像を正確に捕捉せんが爲に、眼に於て内面的につとむる所あるを見る。

十月十九日には手を以て顔を打つことも、亦擦くことも、全く止むに至れり。故に今や全く身体と外物とを精確に區別し得たるを見るべし。少くとも最近の物に依て距離を知り、稍手及び腕を自由に動かすこと



を知りたり。觀念を蒐集せんとする精神作用は明瞭に顯はれ、新たなもの、又は未だ見ざるものに永く注目す。内面的感覺は自身の活動の快樂より明に發達するなり。而して新たなる物体特に運動するものを見ては外面的快樂を示したり。今や小兒は彼に向て話すもの、容態をつとめて注目するは、之によりて彼に對する他人の感情を知らんが爲めなるべく、而して聲を柔け親切なる調子を發するときは、之を喜ぶを以て、幾分か之を解釋し得るを知る。總て兒童は日々の經驗よりして他人が兒童の上に有する所の勢力を容易に感ずるを得るなり。されば彼等に對する他人の感情を知らんとして、殊に他人を十分に注意するは怪むに足らざるなり。

從來小兒は多少不快に感したることは只涕泣と反抗とを以て示せしに過ぎず。強て之を驅逐せんがために猶未だ腕力を用ゆることなかりき。されど今自ら少しく強健なることを感じ、加之不快を精密に識

別するを得るを以て、不快を感ずること烈しからんには、憤怒に依て明に之を驅逐せんとするの力をあらはせり。今や經驗によりて不快は多く他人より及ぼす所なれば、烈しき抵抗をなさば之を退去せしめ得可きことを知れり。而して先にはかゝる抵抗なる觀念は毫末もなかりしなり。總て兒童は速に彼等の叫聲が他人に如何なる印象を與ふるかを知り、最初苦痛の感情の増加するによりて涕泣を強め、叫聲を高めるに從て救助の來ること速かなるを知るに及んでは、單に不機嫌より泣叫して直に之を満足せしめざるを得ざるに至る。余惟ふにこれ即ち憤怒の始めなり。一は不快の感情に伴ふてこれを防禦せんとする力の擴張に基き。一は即ち既に得たる悲哀を他に感せしめ、恐ろしき憤怒の音聲と姿勢とを示して同情を引かんををつとむるなり。故に兒童は多くの不快が他人の意志に基きて來ることを知らざる間は唯悲聲を發するのみ。されども一度不便利なることは他人のため



生起するものなるを感するに至ては其泣聲を高くす。この小兒に於ても亦今此の如し。若し彼の泣聲が直ちに注意せられざる時は怒りたる叫聲を發す。

諸感覺が判別せらるるに從て各感覺は益活潑に感ぜらる。故に感覺の度は愈強まりて遂に情緒となる。愉快の感覺益強くあらはれ、喜悅の發情先つ認め得べし。光線を見ても、殊に將に暮なんとする夕景は會て音注意を起せしに過ぎざりしか、今や明に喜悅を惹起すなり。先には微笑が満足を示すの容貌なりしが、感覺の強まりしによりて、今は之に代はるに哄笑を以てするなり。自身に在りても、亦他人に在りても、跳躍蹈舞の如き急激に變化する運動は哄笑を惹起せり。而して今は癢覺あるを見れど唯腹部に於てのみ明かに認められ、未だ脚に於ては明かならず。これによりて他の感覺の如くに癢覺に於ても亦癢覺として感せられむには他の感覺の比較と發達とを要するものなるを

を證すべし。又不快感にありても、快感にありても、皆その初は判然區別して感せらるるものにあらざるを證し得べし。十一月十日齒生へ始む。是に伴ふ所の苦痛の感は口中に起り、ために新表象と能力との發達を高めたり。これより先き特殊の動機もなかりしかは、手を用ゐることなく、譬令手を動かし物を握るも、永く續くことなく、又只握るのみにては十分に仕事も快樂も與へざるなり。多様にして、變化のある表象を精神に與ふる所の眼は、大に用ゐらる。今や口中の苦痛を絶へず感むるために、常に指を口中に入れて動かすのみならず、物を噛み切りて苦痛を減じ、又は之を散せんがために手に觸るものは皆之を口中に入れんとす。是故に小兒は始め物を握ることを知りしかど長くは續くこと能はず。速に之を止めたり。而してこれを止むるは嫌厭したるが故にあらざ。唯會て斯かる經驗なきが故なり。されば再び直ちに自己の欲するに任かして握ることありとも、此の時猶未だ自己の欲



するまゝに指を用ゐること能はず。只機械的に總て共に働らさ、未だ捕捉せる物体を離すへからざるに、自ら之を開くことあり。遠く離のもの及び手に達せざるものは、握ること能はざるは、恐らくは兒童が未だ離れたるものを手を以て引き寄せることの經驗なきと、其に就きて概して明瞭なる觀念なきによる。小兒未だ手を以て物体を引き寄せることを知らざる時には、全身を前方に屈め、且つ腕を機械的に伸してこれを近寄せんことを勤む。此の如きは全く吾人の自然性の根本的構成に基くものなるが如し。されば吾人が或る離れたるものを得んとする慾望を起す時には、必ず前方に全身を屈し、之に次で手を伸す傾向あるを見る。故に吾人があるものを握らんとして後に反省によりて之を止めんとするときに當りて、少くとも第一の運動をなすことを禁ずる能はざるなり。

十一月二十五日小兒はその前に横はれる物を握り弄ぶことを始め、手

は漸次運轉自在となり、手を以て仕事をなすの手段となし、新表象を得るの機械なることを知るに至る。然れども最初は何物も弄することを知らず。口中に於て噛み、若しくは味ふものにあらずんば、眞に之を投げたり。先づ第一に練習するものは眼及び味官是なり。練習せる視覺の助けにより、又手を用ゐて視覺と觸覺との密接なる連絡をなすによりて、手は新たな表象を得るの道具なることを知るなり、而して殊に手を用ゐて物体を引寄せ、視味兩覺に接近せしむる愉快なる運動を起すために、手は練習せられ目前にあるものを弄ぶに至るなり。故に今や遠距離のものを引き寄せるために手を用ゆるに至る。最初に於ては自ら指の下に来るものを握るに過ぎざりし。而して特に或普通の感覺は識別せられて表象をなす。これより後吾人は聯想の數多なる而かも明瞭なる例を見る。小兒が膝に抱かるゝとき、胸は被はると雖ども其方に寄らんとし、他人が飲むを見れば自己は或物を味ふが



如くに口を動かす。故に彼は既に口そのものを他物と區別し、是れ味覺の場所か、或は滋養を取る道具なることを知りたるなり。又手を觸れて自己の口なるを知り、又類似することによりて、他者の口も同様な作用をなすことを知るなり。今や小兒の夢みることには就きては顯然たる痕跡あるを見る。即ち睡眠中に在て物を吸ふが如く口を動かすなり。口及び胃に於ける刺戟は恐らくは飢渴の感を喚起し、この感によりて乳を吸はんとして口を動かすなり。依て惟ふに彼の口を動かすは全く乳を吸ふの夢を見るなるべし。齒の苦痛漸く増加するに従て、物を噛まんとして各種の物体を得るの慾望を増加するに至れり。このときに於て小兒は遠距離にある物体を口中に入れんとして之に注目するに至れり。如何となれば漸次遠距離の表象發達し。遂に經驗は遠距離の物体を近寄することを知らしむるに至りしを以てなり。最初に於ては勿論小兒は自己の慾望を

満足せんが爲めに他物を自己の方へ引寄することを知らず。又自己が他物に十分近寄ることも知らず。十一月二十九日、小兒は口を以て遠距離のものを採らんとし、敢て手を用ゐざりしは明に手が他物を引寄するの手段となることを知らざりしによる。十一月卅日始めて翼琴を奏するを聞きて非常に喜び且つ爽快を感ずるが如し。惟ふに音調の智識又は之に依てあらはさるゝ感覺なきも音其者が愉快なる印象を與ふるが如し。十二月三十日までは貴重大と云へることを知覺せざりしが、この日自身保護に手を用ゐんとする事を示せり。小兒を抱きて非常に高さ處より急に低下せんとしたるに、小兒は落つることなきために手を以て固く把捉せり。而して非常の高所に差上るは彼に在ては不快なるが如し。然れども未だ落下することを知るにあらず。故に管その恐怖たるや斷崖絶壁に在る人の感するが如き眩暈に似たるものにして



只機械的印象なるに過ぎざるなり。

小兒は顯然たる嫌厭の情を以て黒衣の人に向ふことを避けたり。是に以て黒色は悲哀の色にして、多分不快の念を惹起すものなるを知るべし。黒色は殆んどいづれの處にても悲哀の場合に用ひらるゝ色なるを見て明かなり。然れども吾人に在ては、習慣上より次第に不快の感を尠からしめ、遂に何事も感せざるに至りしなり。この間に於て小兒は手を以て物を握り又引寄することを知る。而して今は諸種の物躰を握り得れども未だ充分なる練習を欠けり。されば直ちに物體を握る能はず。恰好の所に達するに先立ちて、屢々腕を延ばさるべからず。且つ指を以て之を握らんとするには先づ數多の試験をなさるべからざるなり。何となれば、一は未だ指を以て握ることに十分熟練せざると、一は自己の意見に適合するが如く、すべての運動をなし得ざると、又一は未だ遠距離及び位置に就て正確なる表象を有せざればなり。この頃唱歌は必ず小兒の注意を引き、或は跳躍し、或は手を動かして愉快なるを示せり。然れども口笛に傾聽するとなし。されば小兒に印象を與ふるものは雷呂律にあるのみ。味覺は既に稍精密に識別せらる。苦味ある藥劑は極力之に反抗すれども、酒及び食用に供すべき物は好んで之を採るなり。今や徐々として人心に特有なる動作中に於て根原的にして稍開發したる精神活動の存在するを認め得べし。全く愉快の感なければ小兒は喜ばずして泣叫す。ある新たなるもの、又は少しく變化あるものには、共に満足を表して是がため屢々烈しき齒痛をも忘るゝに至れり。今や他より誘導せらるゝとなくして自ら言語の機官を練習して種々の音調を發生せんとす。然れども小兒は猶未だ他より話し掛けらるゝも、亦敢て之を模倣せんとはせざるなり。これ未だ種々なる音調の差別、殊に分明なる音調の識別に就きて明瞭なる觀念を有せざると、未だ發聲器を隨意に活動せしむる

ばなり。この頃唱歌は必ず小兒の注意を引き、或は跳躍し、或は手を動かして愉快なるを示せり。然れども口笛に傾聽するとなし。されば小兒に印象を與ふるものは雷呂律にあるのみ。味覺は既に稍精密に識別せらる。苦味ある藥劑は極力之に反抗すれども、酒及び食用に供すべき物は好んで之を採るなり。今や徐々として人心に特有なる動作中に於て根原的にして稍開發したる精神活動の存在するを認め得べし。全く愉快の感なければ小兒は喜ばずして泣叫す。ある新たなるもの、又は少しく變化あるものには、共に満足を表して是がため屢々烈しき齒痛をも忘るゝに至れり。今や他より誘導せらるゝとなくして自ら言語の機官を練習して種々の音調を發生せんとす。然れども小兒は猶未だ他より話し掛けらるゝも、亦敢て之を模倣せんとはせざるなり。これ未だ種々なる音調の差別、殊に分明なる音調の識別に就きて明瞭なる觀念を有せざると、未だ發聲器を隨意に活動せしむる



こと能はさればなり。總て兒童は他の音調を摸擬せんとするに當り先づ其音調に就て明瞭なる表象を得んがために、簡單なる不分明なる音及び單純なる分明音を發するに就きて久しく之を練習すること明かなり。是れ恰も手の場合の如く、言語にありても前になされたる音又は先きに發されたる音調を發するには、先づ多くの練習によりて準備をなさざるべからざるなり。

十二月三十一日小兒は必ず正しく音響を發したる物体の方に顔を向けたり。依て以て小兒は既に左右兩耳の何れよりして特に聞き得しかを識別し得るを見るべく、又彼の身体と他物との關係を稍確實に知り得るを見るなり。是實に比較によりて物の區別をなすには如何に精微に精神が働らくものなるかを示すものなりと謂ふべし。

今や活動は明かに増加し、覺醒の間は手足の運動暫らくも絶ゆることなし。精神も亦常に快樂を追求して止まず。一度之れを得れば少許

の間も其活動止むことなし。今や既に明かに胸の何物たるやを知りて、これを認むれば喜色外にあらはるゝなり。これ千七百八十二年一月十六日に認めたる所なり。

一月二十六日好奇心の増加益明瞭なり。侍婢が天氣の好き日を擇んで市街に伴へば、小兒は非常に快となし、寒冷なるに拘らず、その變化を見て烈しき慾望を喚起す。されば侍婢を離るゝことを好まず。空腹のときの外は母親よりも寧ろ侍婢を好めり。今やその端緒を見るに如何に迅速に表象を識別し且つ結合するかを明かに認め得るなり。小兒は侍婢が外套をかくることは速かに外出の標號なることを識別するなり。されば小兒の泣かんとする時に於ても、外套を以て被ふ時は之を喜ぶ。又彼は速かに外出せんとすれば、先づ戸を開かざるべからざることを識別するなり。この故に侍婢が戸の方に接近するならば、戸の方に身を壓し寄せて之が開くことを喜び閉鎖することを好ま



ず。一般に兒童はこの時代に於ては其身健全にして活潑なるときは戶外にあるを好み、一室内に密閉するを嫌ひ、殊に長時間同室内に留止するを欲せざるなり。戶外の爽快なるは勿論疑もなく、萬象の變化と其多様なること及び是に由て喚起せらるゝ所の精神の快樂と智識の増加とは戶外に出づることを熱望せしむるものなり。小兒は從來手に來るものは總て全様なるものとして感じたり。遊戲の用に立つものは不快の顔色もせず。何に拘はらず之を取りたり。されども二月七日には一度手に採りし品物を放たず、倦厭するまでは之を弄び、若し玩具を取り去らるれば泣けり。又玩具を以て暫時獨り之を弄べり。先には管之を見るのみにして敢て自ら之を動かさんとはせざりき。されども今は手を用ゐることを知りたれば種々の娛樂に供し、之を取り去らるゝを好まざるなり。

二月十日驚駭と歡樂との言辭を示せり。從來は苦痛、憤怒、短氣、満足の

標章として啻泣叫し、又は腕り、又は微笑するのみなりき。然るに今や新奇なること及び歡樂なるを見れば驚歎する愉快を示すべき自然の標號なるあゝと云へる言辭を用ゆるなり。故に彼は既に充分に新たる物を識別し、明かに新たる印象を感じるを見る。而して、今や彼は足を以て歩まんとし、彼を立たしむる時は之を歡ぶを見る。又人を識別することを得。空腹を感じるときは、すべてその處に多人數居るものゝ中に獨り母親のみを慕ふなり。されども母に付て全く明瞭なる表象を有せず。又衣服に據て男女の差別をなすこと能はざるなり。かくて空腹を感じるときに、彼を拵けば男子に向ても乳を求めんとす。小兒は既に種々の情緒、殊に嫌厭と満足とによりて音調の差別あるを認め、威嚇せらるれば沈黙す。

音調を發するに就きて多くの熟練を積み、種々の音調に應じて發聲器を用ゆることを完成したる后に、三月十四日、小兒は故意に分明なる音



を發することを得たり。又音調を眞似するを得たり。母親がまなる單音を話せば其の口を熟視し單音を摸せんとす。又た容易に發音し得る言語を聞くときは低音にて之れを摸せんがために口唇を動かせり。

四月二十七日、母親或は侍婢が打たれしときに泣けり。之に由て或特別の人を愛すること及ひその人を熟知すること明かなり。今や總ての觀念聯合中最も困難なるもの。即ち表象と其記號或は言語との連絡をなし得るに至るを見る。是れ動物に於て稀有なることにして若し是れ有るも唯大なる勞力を費したる後に得たるものにして決して自動的に發生せるものにあらず。例へば小兒に日々目前に在るものに就きて、今彼の物は何處に在りや、此のものは何處にありやと問はば、彼は指を以て之を指示せり。此の如きは小兒が對象に就きて明確なる表象を有するのみならず、又分明なる音調を知り、而してこの音調が

其物体或は其表象を示すことを知り、これによりて離れたる表象をば聯想するなり。是に由りて既に高等なる精神作用即ち斷定比較の作用が活動し、同類に近き表象を判別し得ることは確然認め得る所なり。蓋しかく比較作用は分明なる音を出すに必要欠くべからざるものなり。是に由て外國語が吾人に在ては初めは皆一様に感じ、之を區別し難きものなるを見る。

觀念の結合は次第に擴張し、結合的感覚及び慾望はこれよりして起るものなり。四月二十八日他の小兒が戯に彼の母親の膝に抱かれしに、小兒は心安んせず。暫時前に吸乳せしにも拘らず、他の小兒をして去らしめんとす。是れ母乳を吸はんとする態度と、味覺の感覚及び是れより起る所の快樂を以て去らしめんことを連結し、他の兒童の位置よりして、そのなす所を知るのみならず、從來自己のものとして吸ひをりしものを他に奪はるゝを不快とし、是れによりて他を排せんことをつ



とめ、且つ美望の念を起すなり。彼が既に飽食せしを以て見れば、空腹はその衝動にあらざることを明かなり。

反省作用及び擴張せられたる判別力の明かなる特徴は、五月十三日にあらはれたり。新たなるもの或は特別なるものあれば、彼は他者をして之に注意せしめんが爲めに、指示してはあはあなる音を發す。此の記號と稱呼とは他人に向て發せしものなることは、他人が其に注意したるを知りて満足するを以て明かなるべし。是に由て之を觀るに、吾人が稍興味あることは互に交換せんとするの慾望が、人性に於て深く根底するを知るなり。反省作用は初めは連續的印象に因り、特に快樂に由りて機械的に刺戟せられ、遂にその痕跡を遺し、感覺の中に漠然として混合す。然れども或る表象が容易に變化し、其中に結合を起すとあらば、新事物と特殊なる事柄とは迅速に注意せらる。されば連續せる愉快なる感覺あらざるも、認識の作用は行はるゝものなり。故に

全く小なる兒童にありては、反省作用は認められざれども、之に次いで表象の擴張によりて活動的方面の作用は發生し、精神は常に新表象の來らんことを待てり。これらの表象の既に全く完全となり、且つ熟達せしことは、小兒が母親に伴ふたる他の二人を遠距離に於て一見して常に精確に認知せるによりて證すべきなり。

九月九日に至るまでは新奇物に注意することなかりき。此の日始めて表象の廣大となりし明瞭なる特徴を示せり。小兒が水を見て之を指示し又疲勞するときには搖籃を指示したり。而して彼が物質的缺乏を満すに足るものは甚だ能く之を知ると共に、この缺乏を満さんがためには四肢を用ふることを知れり。その始に於ては音機械的偶然的運動なりしも、今や此が意識的となりて缺乏の感覺に伴ひ、かくして願望を満足せしむるために、故意に手及び他の部分が共に運動するに至るなり。ある音調を聞き直ちに其意義の何たるやを知るにはあら



ざれども、明に之を模倣することを得。平常見慣れたる物体の名稱を聞けば之を十分に了解し、その物体の眼前に在らざる時にては、名稱に依てその影像を現出し、之を指し示せんとして周囲を眺むるなり。今や又二三の文章を了解せり。十四日に於ては、禮せよ、蠅を打て等の語を解し、常に正しく之を實行せり。

小兒は高所より身体を墜落すること及び充填せる空間と空虚なる空間との差別に就ては未だ識らざりき。十月十四日、自ら身を以て高所より落ちんとし、又「びすけつ」とを浸さんとして屢々之を地上に落せり。十一月九日、人間の精神の活動並に自動作用の高度なる發達を明かに認むることを得たり。初めて自ら玩具に特殊なる運動をなさしめ、又は之に類似せることをなして、明かに喜色を顯はし、且つ之を反復するを以て樂となせり。一般に兒童は從來他人の手を借らざれば爲し能はざることを自らなし得るときは、之を喜ぶものなり。されば自己の

手を以て食することを好み、衣を着し、顔を洗ふ等も他人が之をなすを好まざるなり。

同情と自愛の情とは漸次發達して名譽の情となるなり。十一月十日、小兒が會て愛情の表出として他人に手を捧ぐるを好み、しが偶之を拒絶せられしに泣叫せり。又小兒をして彼がある惡事をなしたる事を了解せしむるときは、顯然たる愁傷の姿を呈せり。すべて兒童の自愛の情は吾人が外面の表出によりて知り得たる以前より存するものなり。兒童に接近する所のもの、殊に母親、侍婢等の寵愛と追従とによりて彼の價值あることを認む。されば自己の行爲及び之と他人の行爲との比較に關する反省によりて、自身の價值を識る以前に於て、既に彼に自愛の情あるや明かなりと云ふべし。十一月二十七日、一二の語を明かに發音し、又其意味を知れり。然れども父母を呼ばんがためにばあ、まじま、と云ふことなく、全く偶然に出で敢てある意義を發



表せんと欲するにあらざるなり。故に思ふに言語は會言語に附屬する影像及び表象を惹起すと雖も之に反して對象及び慾望の影像は言語を惹起すものにあらず。これ蓋し兒童の言語を知るは、恰も大人の外國語を學ぶに當り自國の言語を他國語によりて示さんとするにあらず、先づ他國語を國語に譯さんとするが如く、自己の思想を發表するよりも寧ろ他人の云ふところを知らんと欲するにあるを以てならん。

然れども兒童が用ゐる所の二三の單純なる發音は、意味を有するものあり。例へば特異の物に邂逅せしときには、はと云ふ。これ嫌厭と否定を示すものなり。而してはなる單音は驚愕より起れる反射作用を示すものなるべし。如何となれば始め意外の事に邂逅し、觀念過程が阻碍せられ、俄に方向を轉せしを以て呼吸を抑留せられ、この抑留せられたる呼吸の俄に吐附せらるゝを以てなり。猶未發聲器の充分に

兒 童 觀 察 錄

練習せられざるに於て總ての分明なる音又は了解し易き連合的長句を發せんとするも能はざるよりして、之を表示するに了解し易き身振を以てす。十一月二十九日に於て小兒は身振を以て其表示をなせるを見る。而して其表示は小兒が表象の結合によりて生せしものにして、又實にすべての勢力の發芽を認むべきなり。

會て小兒が汝の身長は幾何なりやとの間に答ふるには、手を高く舉ぐべしと教へられしが、今、ぐるすまゝと云へる語を發音せよと云はれたるに、ぐるすと云へる語の發音難かりしかば、小兒は先づ手を高く舉げ、之に加へて、まゝと云へり。今や小兒は外物及び之が兒童の欠乏を満足せしむる關係と娛樂とを精細に知り能ふが故に、ある物体に向て慾望を起すこと強く、無生物の最も少かなる抵抗も、烈しき憤怒を起すに至る。故にかゝる慾望は持續して其目的を達する迄は之を止むることなし。

兒 童 觀 察 錄



十二月八日、視覺の官能は殆んど十分に發達し、遠景にても眺め得るに至れり。好んで畫像を見、又銅版畫に於て假令小なるも、己れが曾て能く知れる物体は、之を識別することを得るなり。この點に關して「ちえせるでん」氏の盲人に於ける觀察は、練習及び比較は如何なる關係あるものなるやを示すものなり。而して同情と自愛とは發達し、十二月二十六日に於て、小兒は其遊戯を見て笑ひ、又は稱賛するものあるときは喜色を呈せり。今や單獨にて歩行し得るを以て、種々なる態度を取りて、人をして哄笑せしめんとす。今や身体と發聲器とは大抵意に従て働かし得るを以て、明に摸倣せんことをつとむ。かくて總ての音調を摸倣せん。例は鐘を打つときは其音に摸せん。又言語の意義を知て用ゐることあり。例は小兒が上に捧げられんと欲し又は椅子を離れんと欲するときには明に「ねーむー」と云ふなり。今や確に記憶力の特徴を認むるなり。されども、只現在の感覺によりて回想し

得るに在りて、表象のみにては回想をなす能はざるなり。小兒が曾て數度某所に在りしが、その後遠方より此所を認むるとき之を指示せり。これ未だ言語を充分に用ゐること能はざるときにありては、表象もなほ未だ自由に感覺より離れたる過程を取る能はず。從て過去は感覺的補助あるにわらずんば、回想すること能はざるによる。すべて記憶に於ては常に比較が其根底となり、且つここに不完全ながらも、判斷なるものも亦存在せり。これ自動的思考力の起源にしてある動物の思考力とは確實に區別すべきものなり。此等動物の記憶には、判斷及び比較なるものなく、單に過去に聯合したる痕跡と運動とが顯はるゝに外ならざるなり。獨り象は確實及び正當なるものを有することは經驗によりて證明せらるゝ所なり。千七百八十三年一月十一日、明かに鏡に映したる自己の姿を認めたりしを以て、判斷力の存在を見る。かくして小兒は好んで自己の映像に注視し、又種々の姿をなして映する



を見たり。すべて兒童は初めは屢々鏡を弄び、之に映したるものが自己の肖像なることを知るに至る迄には、多くの經驗を積まざるべからず。而してこゝに必要なは、比較作用にして、其根本たる判断力なるものなかるべからざるなり。小兒は特に自己の肖像を見るを好み、鏡に映するを見て娛樂するは、これ自愛心あるを示すものなり。之に由て考ふれば、動物は人間と全く其趣を異にせり。例へば一犬あり。始めて自己の像が鏡に映するを見るときは直にこれを以て他犬なりと見て吠ゆれども、數回の后この映像の答ふることなくんば、遂に黙するなり。此彼が詐はられしを知りしか。將た又他の應ぜざるを見て満足するものなるかは明確ならざれども、兎に角犬が自己の容貌を視て以て樂をなすものとは思はれざるなり。何となれば、犬はこれを以て自ら樂とし、此れは吾なり、此の容貌は吾を示すものなりと云ひ得べき程、其反省作用を擴大し難ければなり。今や小兒に依て見るに、事物

を模倣せんとすることは益擴張せられたり。從來模倣したる多數の音調の外に勤めて談話を模倣せんとし、遂には多くの解すべからざる音調を發するに至る。概して模倣の外形より始まるは、これ多くはもの外形を知覺し得るを以てならむ。又小兒は談話の目的を知るは疑ふべからざることにして、意義なき音に伴ふに身振を以てし、之に由て明かならしむるを以て知るに足らむ。例へば彼に至らんと欲して、到り能はざる所に行かんとするときに何處に到るやと問はるれば、指を以て其場所を示し、之れに加ふるに稍明確ならざる音調を以てするなり。

新奇にして且つなるべく精密なる表象を得んををつとめたり。一月十八日小兒の手に一新物を得たるに、四方より之を眺め、之を獲り、且つ之を回轉せしが、其中に或物の響あるを知り、其中に在るもの知らんとして之を開かんとせり。蓋しこれ小兒は幾多の經驗に據りて、斯か



る物は開てその内部にあるものを見得ることを知れるなり。既に小兒は是を持ち來れ、是を横へよ、是を去れ等の言語は了解すれども、未だ自ら他人に其意を通ぜんとして用ゐること能はざるなり。何となれば一は發聲器の發達猶不充分にして、自己の欲する所に從て言ふと能はざると、一は言語より物体に、物体より言語に關係を付くべき經驗の足らざるとを以てなり。賞賛と喝采とを得んとする希望は、漸く廣く、益強くなれり。されば或は特異なる新奇なる姿態を現し、或は玩具を動かして自ら嘻笑し、且つ見まはすは、全く他の喝采を博せんがためなり。又身を飾り、新衣を着する時は、殊に愉快の觀を呈す。これ恐らくは、斯の如き場合には、他人の賞賛感服するを知れるによるものならむ。此頃妹が出生したるに不快の徵候を顯はせり。妹が母の膝に倚り、又小兒の搖籃に横はるときは、妹を打たんとせり。何んとなれば、永く自己の專有にせしものを、今や他人に奪れんとするを以て、これを不快と

すればなり。從來同情てふことは、自己的のものにして、單に自己の情を他に發表するに過ぎざりしが、今や乃ち然らず。他人の情に感動するなり。妹の泣くときは、自身も亦共に泣けり。又廣き判斷力及び繼續する思考力をも認め得べし。當時小兒には公然食すことを許されたる食物の外は、他に觸るゝことを禁せられたり。されどもかゝることとは、彼をして恐れしめざるなり。他人に見らるゝことなく、砂糖の小塊を掴んで、他より見られざる一隅に潜行せり。人は彼が何をなすかを知らず。而して彼を搜索せしに、小兒の砂糖を食ひつゝあるを發見せり。動物に在ては、食を窃取して屢々打撃せらるゝとあれば、その後食物を掠めたるに當りては、忽ち逃走す。これ聯合作用によりてその責罰を想起すればなり。然れども上述の小兒に在ては、同理を以て規し難きものあり。如何となれば、この場合に於て小兒は逃ぐるにあらざ、若し之を食ふことを發見せらるれば、直に取去られ、知らるゝことな



くんば食ひ得べしと云ふ思考に基いて潜行するものなればなり。二月七日に於て光線は如何なる愉快なる印象を與ふるものなるかをあらはせり。小兒は月を見て特別なる喜悅を呈し、其後小兒に月を見せんと云ふときは喜ぶが如し。加之室内に射入する太陽の光線も亦快感を與ふるなり。而して言語に於ても著るしき進歩をなせり。三月八日小兒は物体を見て此に就きて屢々聞き得たる名稱を反復せり。されども多くの綴字より成れる語を言ふことは尙困難なるを免れず。但し此等の言語に付ても、常に其結末の綴若しくは音調中重に聞ゆるものは耳に入り易きより之を話すことを得るなり。子音 Z、SCH、W、St、sp、及び二重音は發音すること能はされども、其中 P、T、K、は容易に發音することを得るなり。子音の連合するには發聲器の自由に用ゐらるゝこと、及び音調を正しく聞き取らんがために、練習したる敏捷なる耳を要するなり。是等は復音に於ても亦必要なるものなり。自動力の

益發達せることは兒童が好んで困難なることをもなさんとするを以て見る可し。即ち狭き場所に至らんとすること、危き態度をなすこと、重き物を連ぶこと等を好んでなすによりて知る可し。普通の事容易のことはなさんともせず、また樂むこと少なし。而して困難なる事となし得れば廣大なる勢力の感情を生ずるに至る。これらは決して教育によれるにあらず。或は名譽心によりて鼓舞せられたるにあらず。全く人間の性質に深く根底を有するものなり。されども兒童に在ては、内部の動機によりて、迅速に且つ單純に發表する能はざるなり。加之、尙その發表を妨ぐる所以のものは兩親又は監督者が兒童の大膽を抑制せんとし、或は之を罰せんとすることに苦心し、若しくは苦心せざるを得ざるを以てなり。

三月二十七日、二綴の語を話し、身体の諸部を識別し、其名稱を呼べば正しく其所を指示したり。又室内の諸物は皆其名に由て之を知り、始め



て彼の目的に従て發言し得たり。而してあるもの、表象は直ちに其名稱を隨伴し得るを以て、言語と表象とが直接に關係するを見る。又僅かの品物に限りてはその名稱を呼べり。然れども未だ數語を集めて一文を作ることも能はず。而して自ら練習を積み、六月三日に於ては、文法上正確なりと云ふ能はざれども、名詞と動詞とを以て短き文章を作り得たり。この時には不完了法を以て命令法に換へ、他の必要なる詞格の代りに第一格を以てし、冠詞は用ゐることなく、あるもの、話を聞く時は概して一格に注意し、他格の語尾に付て知ることなかりき。語尾は發言する場合に於ては多くは曖昧にす。吾人は多くは不定詞を用ゐ、他の時をあらはさんとするには、多くは他の語を變轉して言ひあらはすを以て、之が大に印象を與ふるものなり。この文法上の不正確を生じ易きは實に其根底獨逸語の特別なる組織に存するなり。兒童に不潔の習慣を去らしむること、特に自ら汚さしめざること、甚だ困難なり。かくて小兒は汚れたる襦袢を再び着するを欲せず。指に於ても、襦袢に於ても、何れも不潔のまゝに捨ておかんと、は望まざれども、全く清潔ならしむること能はざりき。自ら汚す場合には其不潔なるを知り、其清潔なるを望み、自己の所行を耻づ。此等過失の根本は、要するに排泄の必要を充分に感ぜざると、遊戯に耽りて之を注意せざることによる。嫉妬心と名譽心とは益發達し、妹が悦ばさるゝ時には自己も悦ばされんとして、來らんとし、又あるものを持ち居れば之を奪はんとし、又密に打たんとすることあり。

今や記憶作用大に熟練したり。七月廿日家のある場所に来れり。これ彼が之を汚せしが故に四週間に罰せられたる所なり。他の原因もなかりしか、直ちに云へるやう、室を汚すものは打たると。その言語は完全ならざるも、其言はんとする所の意義は明瞭なり。故に斯かる時の表象が殘留したるものなるを知る可し。然れどもある時間前の



事項に付いて問ふも答ふること能はざりき。蓋し記憶は現實の感覺によりてこそ作用をなせ、表象の内面的過程によらざるを以ての故ならむ。是に依て惟ふに小兒がその思考力を自由に働かし得るに至るは、現存せざる所の表象を隨意に復起し得るによるものなること明かなり。

須臾にして、大なる進歩をなし、聯合せる觀念の系列は益その觀念の數を増し、前後に變轉すること、次第に容易なるを得たり。七月二十四日、鴨を見しには、あられども、鴨の叫ぶを聞き、小兒は曾て鴨を見、又はその聲を聞きたること稀なりしにも、拘はらず、鴨と云へり。これ既に鴨の叫聲は鳥の影像と連結し、又其影象は既に言語と相連結するを以てなり。これ聯想作用の外に反省作用なるものあることを豫定するものにして、この反省作用がある一の物体より聽覺及び視覺の印象を生ずるを以て、この兩者は連絡して認知せざる可らずとなすなり。一

度聯合したる表象は其結合堅くして、數月の後に至るも再び分離することなし。全月二十六日、小兒は馬鈴薯を見たり。これ曾て彼が好で喰ひしことあるも、一二ヶ月以來見たることなきものなりしが、今再び之を観るに及んで直ちに馬鈴薯と云へり。此の如くして知り得たる語并に多數の結合によりて知り得たる語に因て、觀念の系列は外部に於ける印象に獨立して存在するに至れり。而してこの小兒の少さき腦中より自ら多くの表象を惹起し得べく、又連續して顯はし得べし。一日小兒は風雨のために少女の殺されしことを話すを聞きしに、此の談話者の姿態は深く彼に印象を興へしが如く、ある日小兒は當時其話を聞きしものに、あらずは解し難き不完全なる言語と態度とを以て之を語れり。

七月卅日、遂に始めて完全なる、然れども簡單なる文章、即ち彼が立てり、彼が横はる等の如き言を發せり。曾て冷淡に注意するとなかりし妹



及び犬も共に次第に愛せらるゝに至れり。八月二十三日には兩者に苦痛を蒙らしむるを欲せざりき。何となれば兩者が彼の遊戯の娛樂に供し得るに至りしを以てなり。

又排泄せざる可らざる時には、自身を汚さざるために他者を喚ぶことを知れり。されば彼は奸策を以て他の目的に利用せんとするなり。抑も小兒の椅子高く、こゝに座すれば卓上の食物を見るべく、大抵之に達することを得るを以て卓上に食物の出るを知るや、茲に來らんがために排泄の口實を用ゐるなり。蓋し他の願を以てはこの椅子に乗る能はざればなり。

これ明かに考慮判斷あるを示すのみならず。推理の端緒をあらはすものなり。若し模倣作用に據るものとせば此れなくしても可なりしならん。されども模倣作用に據ることなくんばこれなくして何ぞ或る手段を目的に向ひて適用することを得ん。而して實にこの時に當

兒 童 觀 察 錄

兒 童 觀 察 錄

り模倣作用も欠けり。又他の訓育を受けしにもあらず。唯其純然たる自己の思想に基つくのみ。其動物に付て同様なる例を説くものあれども、此は甚だ稀れなることにて、概して作者の思考より生ずるもの多く到底確實と認むべき理由なきものなり。小兒は己の欲する所をその妹がなさゝるときは妹を愚鈍なりと稱せり。彼の自愛心は既に彼と他者との比較に於てあらはるゝものと云ふべきなり。

八月二十六日、漠然たる所有と云へる觀念が發達するを見るなり。小兒は彼の妹が己れの椅子に倚ることを欲せず。或は自己の衣服を着用するを欲せず。此等のものは總て自己の物なりと稱せり。斯の如く自己のものを他人が用ゆるを欲せず、自己のみ専有せんとする慾望の最初の原因は、必ずや恐怖の念に基けり。即ち現存せる快樂が奪はれ之を見ること能はざるを恐るればなり。かゝる慾望は小兒のみならず、ある動物にも存するものなり。されども一旦慾望が満足せらる



れば乃ち止む、其他の慾望、即ち一度自用に供したるものは永く是を所  
 有せんとする確固たる所有權の本來の基礎は、何に基くかと云はゞ、即  
 ち未來の娛樂若しくは使用を失ふを恐るゝに在り。故に是れ先見な  
 るものを豫定せざるべからず。これ動物の能はざる所なり。多くの  
 動物は冬期に先立つて其糧食を貯蓄すと雖ども、吾人は之を以て先見  
 なりと見做すこと能はざるなり。何んとなれば動物は冬期及び其時  
 期間の食物に缺乏を知らずして既に糧食貯蓄を計ればなり。  
 而して小兒は自己の物品は他をして採らしめざるも、妹のものは好ん  
 で之を奪へり。是れ蓋し自己の物品を増加せんとする慾望に被はれ  
 て自己の物を自己の欲するが如く、妹も亦自己の物に就きて欲望する  
 ものなることを感ぜざるによるものならん。吾人が烈しき慾望の起  
 りたる場合に就きて考ふるに、廣遠なる思慮は消滅するものゝ如し。  
 例へば未開人が相互の間には正しく所有權を侵さざるも、外國人に對

してはその所有權を奪ふことある所以のものは、實に茲に存せり。彼  
 等は思へらく外國人に對してはその義務を負ふの責任なしとして意  
 に介せず。又彼等は其慾望を抑制することを知らざるなり。  
 發聲の練習と、言語の學習とを積み、自由に精神の欲する所に從て表  
 象を得、遂には内面的動機に由て多數なる連続したる表象の系列を喚  
 起し、又思想の系列を連合し得るに至れり。是に至りては表象を廣く  
 働かしめ、また多く活動せしむる力、殊に詩的勢力が訓練せらる。十月  
 二十九日小兒は甘藍の莖を切て多く、之を排べ、その一を以て各一人と  
 見做し相互に訪問せしむる真似をなせり。是れ外面的原因あるにあ  
 らず。己を訪問したる人の表象起り、此の影像が直ちに甘藍に轉ぜら  
 れ、甘藍を目して人となせるなり。されば始めて詩想の起るは既に得  
 たる心象を外物に轉置するに始まるものなるを知るべし。これと同  
 時に起る者は有意的及び自作的なる觀念聯合これなり。これすべて



の談話、すべての技術の根元となるものにして、標號によりてすべてのことを知らしむるなり。人類は動物と異なるものを有し、又心象及び觀念に於ても同じからず。人にありては自動的に作りたる觀念聯合を有せり。是故に動物が言語を有せざる理由の根據は、言語の機官が適當なる柔軟性を欠くと云へることよりも、なほ一層深奥なる所にありて存す。

今や思考力及び試験力は十分なる根底よりあらはれ來る。十一月十三日の朝に於て、小兒は窓外を眺め晴れたる雲を見たるに、之によりて數週間以前に見たる虹のことを回想して、直ちに判斷して曰く、吾は虹を見るぞ。蓋し判斷の重なる原因となるものは明に類似の關係是なり。何となれば、類似に由て現在存せざる影像を喚起し、而して後會て知れるものと、現在見るものとの間に比較を起すなり。其の時人あり、そは虹に非ずと云ひしに、彼は直に答へて曰く、虹が今眠り居るなりと。

何故に之が虹ならざるべからざるかを説かんとす。眞實らしきことを以て基礎となさんとす。是に依て判斷の基礎を發見するに、思考力が用ゐらるゝを知るに足らむ。是又神人同形説が人性の中に存する傾向の深さを證するに餘りありと云ふべし。而してこの神人同形説は一は外物を人間視し、又無生物を生物と考ふるより起るものにして、この外物を人間視するは、吾人が通常既知のものを以て未知のもの考ふるが故なり。これ吾人の如き理會力の有限なるものにして、常に活動して止まることなく、又その活動は不愉快なるものに向ては働かざるが如きものにありては、止むを得ざるものなり。新感覺又は新影像の起る場合に於ては、自己の内面的活動及び聯想によりて既に熟成したる表象を混合し、未知のものは既知の影像によりて理會せらるゝなり。而して、吾人以外の物体の表象に於て、吾人の性情并に性質の影像を混入するは、頗る容易なることなるを以て、すべてのもの



をば吾人に似たるものとなし、活動体なりと思惟し、又同一の基礎よりして、同じ力によりて働かざるものなりとせり。次に無生物を生物視するは、無生物は吾人に快樂を與ふること少し。故にこの無生物をして吾人に種々の仕事を與へしめんがために、之を吾人に接近せしめ、又生あるものたらしめざるべからざるによるなり。この故に甘藍の例に於て見たる如く、兒童が好んで生なき玩具を以て人となすものなり。

同一なる實例は同日に於て見られたり。余は一の時計を取り、小兒の耳に當てしに、小兒は暫時その音を聞て曰く、この内に「フリボン」(犬の名)ありと。彼は運動及び不變の音聲は生命あるものより來るものなりとせり。この定理は未開の民の取る所にして、神人同形説に根據し、すべて運動するものは人間又は動物と一樣なるものとして信ぜられたるものなり。この例に依て野蠻なる國民の思想は、組織なき正當なる

經驗によらざる、理會の表象より起るものなること明かなり。四月二日に起りたる判断を見るに、太陽既に没したる晩景に於て、小兒は曰へるやう、太陽は恐らく寢に就きしものならむ。明朝再び起て、茶を飲み「パン」を食すべしと。すべてこれらの判断は自己の考察より起りたるものなり。人は曾て彼にかゝることを語りしに、あらず、彼は異なる觀念を作りたるなり。此の如く學習して得たるにもあらず、摸倣に出でたるにもあらず、種々の原因によりて唯に自己の思想に據れるものなるを知るべし。

今や名譽心は漸く發達して眞の名譽心に變し、他人の稱賛及び非難は皆之を顧みるに至れり。千七百八十四年二月十四日、小兒はあることを善くなしたりと信ぜし時に於て云へるやう、人は善き小兒なりと云ふならん。又小兒が頑惡なる時に隣人が見ると云へば直ちに之を止めたり。



吾が觀察する所此の如しと雖ども他の業務に妨げられなほこの攻究を繼續することを得ず。然れども諸君が同様なる計劃をなさんことは余の大に希望するところなり。かくして數多の觀察材料を蒐集して比較研究をなさば、確定せる結果を得るや、明かなりと謂ふべし。而して重要にして而かも未だ研究を怠られたる心理學の一部、即ち教育學の基礎たる人間の精神の發達を研究する所のものは、顯著なる進歩をなすに至るべきなり。(畢)

「ペレー」氏著「ティードマン」氏兒童觀察の批評

教育研究所譯

第一月 出生後直ちに「ティードマン」氏は種々の運動及び作用を觀察し、之を有機的、射制的の本能及び本來の傾向に歸せり。生後速に幼兒は乳母の指を吸ひたれども、布片にて包める柔軟なるものを口中に入れし時の外は、永く之を吸ふことなし。此頃既に眼球をあらゆる方向に動かせども、殊に運動する物體の方向に注意せり。然れど眼を動かすことは「ティードマン」氏が考ふるよりも尙一般なる事實にして、新生兒及び動物に於て見る所なりとす。(假令彼等が未だ物體を見分け難き時に於ても、之れあるを見る)又「ティードマン」氏は纏ふたる衣服の壓迫を免れんとして、身體を動かすこと、或は一般に苦痛を免れんとするこ



と、或は身体を悶へて苦痛を減せんとする事、或は或部分に於ける充血より起る刺戟を減せんとすること、すべて此等の要用なる而かも確實ならざる運動は、故意になすが如くなれども、實は有機的軀制上より必然衝動せられたりとして觀察せり。然れども「テイーデマン」氏は疑問を提起して謂ふ。此等の動作は既に個人の意向と習練的智識と相混じて生起せしものならざるや否やと。惟ふに現今にありては大人及び特に幼兒の精神現象中に、大部分は、反射作用及び無意識的作用とありとするに拘はらず、余はこの問題に向ては兩者が混合して生起せしものなりと答へんと欲す。

余は小兒を以て單に一の機械なりとは考へざるなり。故に余の立脚地より曰へば幼兒が誕生の初日に在りて、故意に動作することありと云はん。而して「テイーデマン」氏にとりては事實の説明として見做さるゝ事情は余にとりては例外のことなりとなさんとす。「テイーデマン」氏

曰く、幼兒が空腹に苦しむ時には、之を和げんが爲めに、屢自身の指を口中に入れんとし、或は若し之を握ることを得ば他人の指を屢々口中に入るゝことあり。……是れ或物を口中に入るゝときは空腹の和らげらるゝことを知るなり。……口中に入れんとして手腕を動かすことを經驗せざれど、飢渴を感じる所を知るを得。然れども是れ本能的計畫に基くにあらず。又個人的經驗の結果に據るにあらざるや明かなり。小兒は初日に當りて、既に精確に快樂苦痛の存在する場所を知ることを得。又少しく自体の諸部分を區別し得るや、確實なりと云ふべし。

「テイーデマン」氏は掌中に置かれたる物体を握る時の指の運動に付て、充分なる説明を與へて曰く、機械的作用には故意なるものなし。幼兒の指は恰も感じ易き植物の葉及び花の如く、ある物体が之に觸るゝときは閉づるなりと。又彼は兒童の生活の初めに、蹠に軽く觸るゝと



きは足を引くことあるを見たり。之に就ては説明を欠けども、テイデマン氏は恐らく之を本能的機械作用に歸せしなるべし。

此の時代に於て微笑することなく味ひを判別すべき力なく、嗅覺に至ては皆無なり」と云ふと雖ども、是れ事實を精密に究めたるものにあらざ。その説明も、むしろ大膽に過ぎたり。テイデマン氏の云ふ所に據れば、簡單なる感覺はその辨別作用の甚だ容易なるものにて、明瞭にして精細なる觀察をなし得るには、練習を要し、且つ比較をなさざるべからずと。蓋し食物を取ると共に機關を強壯にし、益其職能に慣れしむることを要するは、余も亦許容する所なり。されども小兒が辛味と甘味とを區別する爲めに、之を比較する經驗と機會とを有せざる可らずと云ふは、吾人の想像し得ざる所なり。

近頃の觀察者、殊に「デアウキン」とは一致せざる所なるが、テイデマン氏は第五日目に微笑することを見、此を以て快樂の動機に據るものにあ

らず、寧ろ有機々官の装置に基くものなりとせり。之と同じく睡眠中に於ける發音及び運動を以て、全く有機体の刺戟性によれるものなりとなせり。實に彼は幼兒の生后最初數日間に於て、夢の存在することを許さざりき。此の最後の假説は價值あるものならんが、何人も之を證明せざりしなり。テイデマン氏は彼の正直なる證據なれども、或事實に於ては之を認むること遅かりしが、知力及び感覺性の進歩を認むることは早きに過ぎたり。

九月五日、即生后十三日に、最も簡單なる感情及び感覺の中に經驗して得たる觀念の痕跡を示せり。幼兒は幾分が味ひたる後に、ある藥劑を嫌ひ、其嗅ひに由りて、又は之が與へらるゝ容態に由りて、藥劑と食物とを區別せりと。これによりて考ふれば、比較作用の進歩實に迅速なりと云ふ可し。此の頃既に目付き相貌は喜憂を表示し、談話する人の身振に注意し、明かに之れ過言なり、又彼等の語はその啼叫に影響する所



あり。テイデマン氏曰く、すべて此等のことは既に集められたる觀念の存在せるを示し、他物と彼に類似する動物との區別及び種々なる感覺を一層精密に區別することを證するものなりと。すべて此等の觀察は或は精密を欠き、或は少くも悪しく解釋せられたるものなり。何となれば、小兒にても、動物にても、其の心的現象の起點は機械的なりや、或は意識的なりやを究め、其結合并に發達を説明せんことは、容易の業に非さればなり。余は現に生后八日の小猫を養ふて之を觀察するに「テイデマン」氏が示すものに似たる事實を見るなり。されども、是を以て單に感覺のみ機械の装置のみ、本能のみ、遺傳的反射のみなりとするは科學的方法に反する所ならん。生後三日間位迄は指を以て小猫の頭及び首に觸るゝ時は愉快に感ずるが如く、手を以て之に觸るれば恐怖するか、或は憤怒するかは明かならされども、兎に角、叫聲を發するなり。眼を閉ぢたる時にても足を動かさし、之を突出して母猫に觸れんと

するなり。此をなす様は、宛ながら戯をなさんとするに似たり。今日撫でたるに、恰も蜜蜂の聲の如く靜にころ／＼と云へり。若しあらゆる動作を以て無意識的作用なりとせば、何時吾人に意識的作用の存在するを示すものなるか、さりとて此動作を以て盡く意識的作用に歸せんとするは過言なりと云はざるべからず。

フレデリック、テイデマン氏の出生後十八日目に於て、既に枚舉せられたる觀察が、新たなる事情によりて證明せらるゝを見る。即ち幼兒は顔面に柔軟なる手の接するあれば、直ちに食物を採る態度をなし、泣叫を止め、胸を索むるなり。「テイデマン」氏は此を以て觀念聯合が稍確定せるものとなせり。斯く種々の感覺を判別し得るに、自体及び距離の觀念は「欲損せり、或は不定全なり」若し幼兒の手を自由に放置するときには、自己を打ち或は掻きて傷くることもあるなりと云へるが、惟ふに、此の觀念は欠損するにあらず、不完全なるものなるべし。



第二月。一ヶ月と三日を経て、幼兒は顔を打ち或は擦くこと稀れになるは、此れ苦痛の經驗、及び疑もなく、力の増加せるによる。又睡眠時間の減少は身軀の活動の増加せる爲めなりと説けるは善き説明なれども、此の時代の幼兒に在ては、他の原因によるともあるなり。例へば、食物の不充分なることによることもあり。此頃他人の態度と擬態とを見て微笑せり。是れ其運動の變化を見て快とするに在るか。或は之に加ふるに多少同情の意を表するに在るか。之に關して「ティーマン」氏は「幼兒に話しかくる時は、簡單にして不分明なれども、變化に富める音を發し、之を摸せんと勤むるを以て同情を寄する證據なり」とせり。一ヶ月と五日にして、「ティーマン」氏は明瞭に辨別する感覺が確に存在する者として曰く、「藥劑を與ふれば之を嫌忌す。又幼兒が始めて手を伸ばし体を屈して物を採らんとするを以て自体と他物とを區別するを知る可し」と。此の如き多少意識的なる運動は、猫及び犬にありて

は一週間に至らずして之を見るを得るなり。されども、小兒としては、「フレデリック・ティーマン」は此の事柄に付ては早熟なるが如し。感覺より觀念を作る傾向あるは明瞭なり。「以前に於ては物体を長時間注目することなく、一物より他物へと轉視すること迅速なりしが、今は暫時は注目して之が影像を得んとするを見るなり」。是れ好奇心の發生を示すものなり。「デアワキン」及び「テエン」は稍後に於て此の事あるを見たり。一ヶ月二十七日にして、幼兒は以前より能く自体と他体とを區別するを得たり。何となれば、最早自ら自身を擦くことなればなり。彼の好奇心も亦發達せり。何となれば、新らしきものにあらざれば、注視せざればなり。(是れ過言と曰はざるべからず)又感情の表出を察知するを得るなり。何となれば、話かくる人の身振を注意すること、以前に勝り、やさしき語を聽て慰むる所あるを見ればなり。幼兒は自己の活動



を知れり。例へば自ら喜の身振をなし、并に憤怒を示し、不愉快なるものは暴力を以て之を除かんとするを以て知るべし。されども、從來は不愉快なる事あれば、或は流涕し、或は抵抗せしことありしなり」と云へることには、賛同し難し。今論ずる時代の幼児に在りては、涙を流すことなきなり。「ティーデマン」氏の場合に於て流涕すと云へるは泣叫を意味するなり。加之、小兒が泣かんと欲して流涕することに就きての哲學的思想は、ルソー氏の考に基けるものなるを認む。

第三月。「ティーデマン」氏の日記中には、日付或は精密なる觀察を欠けるものあり。殊に後者は尤も必要なるものなり。感覺は次第に強健に、且つ活潑となりては、感情を強む、茲に吾人は始めて快樂の強き情緒を認むるなり。從來微笑は満足の記號なりしが、今や微笑に換ふるに、此笑を以てするに至れり。癢ばゆき感情は、茲に感情なる語を用ゐざる可からざるか、腹に於て顯はるゝも、蹠に於ては顯はれざるなり」と。「テ

「ティーデマン」氏は此の進歩を以て觀念の發達并に觀念の比較に歸し、此等のことありて快感を益分明ならしむるものなりとせり。吾人は此の事實に關しては、「デアウキン」氏が其子になしたる觀察を記憶するを要す。彼は其兒の生后一週日目に紙を以て足の蹠に觸れしに、兒は足を引きたりと云ふ。一ヶ月十七日目に齒生ず。又「ティーデマン」に従へば新たなる觀念及び能力を生ぜりと。即ちこの時より以前には手を動かすこと、目を動かすに及ばざりしが、今や口中の苦痛ある爲めに不絶指を口中に入れ、或は掴み得たるものを口中に入る。かくして最も確實ならずとはいへ、物を固く握ることを知るなり。されども、彼より離れたるものを握らず。猶身體の運動は本能的慾望に依て全身を屈め、腕を機械的に伸張するなりと。以上の事實は「ティーデマン」氏によりて記載せられたるものなれども、その時期あまり早きに過ぐるなり。

第四月。三ヶ月二日に於て「幼兒は手に達するものを握て自ら快とせ



り。又、幼兒は手が新觀念を得る器具なるを知り、加之、手は之を動かして自ら欲する物体を眼及び口に接せしめ、快を探るべき運動の手段となることを識るや、否や、屢々手を動かし與へたるものを弄せんとす。是に於て、吾人は遊戯を以て半ば美的の快樂となすに至るは、遊戯に用ゐる最初の機關なる、各感官の強さと、熟練との發生に伴ふものなることを見る。此時に於て、「ティーマン」氏は明瞭なる觀念聯合の多くの例を挙げたり。乳母の膝に在る時、他人が乳を飲むを見れば、胸邊が被はるゝ時にも其方に向はんとし、恰も物を味ふが如くに口を動かせり。此の作用は幼兒が口の用法を知るのみならず、同じ體制を有するものは眞似をなし易くして、同一なる事をなさんとする自然の運動、即ち同情なるもの、結果なりと云ふこと能はざるか。「ティーマン」氏は同時代に於て幼兒が睡眠中に手を以て吸収作用をなすを認めて夢の始まりなりと推察せり。「ティーマン」氏の幼兒は他の點に就ては早熟なれ

ども、此の點に關しては通常の小兒よりも後るゝが如し。通常の小兒に在りては是より前、既に其運動により、其啞泣により、其音聲の調子により、前額及び口の収縮により、吸収作用により、夢あることを示せり。「ティーマン」氏は、次の事實を説明して曰く、齒生ぜんとして痛漸く増加する時には、あらゆるものを噛まんが爲めに、口を以て探らんとする念増加するなり。此の時幼兒は物体を近づくことを知ると雖ども、未だ手のこの用をなすことを知らざるなり。何となれば幼兒は物体を探るに先づ口を以てし、手を以て之を口に入れざればなりと。然りと雖ども、余はこの解釋に同意すべきかを知らざるなり。物体を近づくることを知り、又口に運ぶ方法を知れる小兒に在りては、活潑なる觀念の強き勢力あらざるを得ず。即ち躊躇なく齒痛を免れんとするなり。されば最近距離にあるものを探りて之を醫せんとするなり。加之、此の時代に於ては、「ルーソー」の注意せしが如く、口によりて生活するのみ。



されば物を判別するには味覺に訴ふるの外なければ、齒痛の刺戟なきも近邊に在る物を採るには、この口に依るものなり。或日余は十五分間許、六七ヶ月の幼兒を抱ける婦人に従ひしに、幼兒は余の方に顔を向けしも、余を顧みることなく、母親の面衣のひらひらする端を、絶へず、口を以て捕へんとするを見たり。

第五月。重要なる記載すべきことを欠けるを非難すると同時に、觀察者の機敏を賞揚し能はざるも、彼は偽らざるを認めざるを得ず。「テイ・デマン」氏は十二月三十日に至る迄、何事も著るべきことなしと云へり。是れ觀察すべきことなしと云ふことなるか。若し觀察すべきことなしと云は、その誤れるや明なり。されども、此は看過し置かん。又曰く其時には幼兒が身體を支へんとして手を用ゐたるを見たり。又或時幼兒を抱きて、急に下に降せしに、彼は落つるを防かんとして手を以て緊着せり。又甚だ高さに上げるは不快なるが如し。是れ未だ落つる

の念を有せざるも恐れて緊着する所以のものは、全く吾人が斷崖に臨んで眩暈に似たる感あるが如く、單に機械的作用に外ならざるなり」と。されど著者の言は、時に關しても、又其説明に關しても、過まれるは、數多の實驗に據りて明瞭なり。吾人は此時に於ては言ひ顯はし難き感情ありと思ふなり。生後二週間の犬及び猫に於ても、又未だ兩眼開かさる猫すらも、彼等を高く捧くるとき同様なる恐怖の記號を見る。又「テイ・デマン」氏が所謂「空所の憎惡」あるを見るなり。是に由て見れば、常に地上に住して空中に浮遊することなきものに在ては、感情及び嫌厭の情に於て遺傳的又は無意識的影響を受くるなる可し。曾て記せる事あるが、余が二三才の時に於て、當時吾家に同居せし人の記録によりて其年齢を知るなり、乳母が戯れに余を抱て窓外に投げ出さんとせしことあり。其恐ろしかりしことは今日尙余が記憶する所なり。

「幼兒は黒衣の人を見るときは嫌厭の狀をなす。是れ黒色は其性不快



の感を興ふるが故なるべし。さればこそ、凶事ある時は黒衣を着する  
 ならん。此時幼兒は手を以て物を握り、又物を立つることを知れども  
 猶ほ充分なる練習を欠けるなり、他人の歌ふことに注意し、之に伴うて  
 飛躍し、彼の愉快を示せり。されど口笛を傾聽することなし。(余は不  
 思議の事なりと思ふ)されば、感を興ふるものは唯音律あるものに  
 み限られざる可らず。味覺あることは極めて判然たり。苦味の藥劑  
 を興ふれば極力之を拒むも、酒或は食物は喜んで之を取るなり。終に  
 靜坐することは退屈を生じ、少しにても活動する時は、齒痛さへ忘却す  
 るとあり。諸種の音を出すも、故意に出すにわらず。自然に出すを得  
 るなり。又目前に生じたる音を模倣せんとすることなし。是れ音の  
 差異を辨別し能はざるによるか、又は其發音器を自由に働かすこと能  
 はざるによるなる可し。「ティーマン」氏は幼兒が言語を發することに  
 付て初めて説明せし人なり。其後このことは「テエン、デアウキン、エツ

カーボロック」等によりて確定せられき。四ヶ月十日に、幼兒が會て聞  
 きたる音響の生ずる方向に必ず向くことを見たり。

余は稍遅れて此の事實を見たり。活動の増加すること漸く判然とな  
 り。覺醒する間は手足の運動暫らくも絶ゆるをなし。胸を見て喜ぶ  
 と云ふと雖も、余にとりては其進歩むしる遅れたるが如く思はる。

## 評批の察觀童兒

第六月。「ティーマン」氏は幼兒が慾望の成長するを見たり。兒は漸く  
 自身を知り、快樂の多からんことを望むに至れり。是れ下の事實によ  
 りて明かなり。即ち兒の外套が侍婢の手に取らるゝ時には、自身が外  
 に出づるものなるを知りて、喜ぶ所あるを以て知るべきなり。加之、空  
 腹の時の外は母よりも寧ろ侍婢の傍に在るを欲するなり。又玩具を  
 弄するを樂しむとす。何んとなれば、能く之を弄ふべき方法を知れば  
 なり。又自身の者を奪はるれば、必ず叫泣するなり。五ヶ月半にして  
 わいと叫び始めて驚駭と快樂とをあらはせり。(「ティーマン」氏は敢て



是れが摸倣なるか或は自然に發せしものなるかを云はざりき。歩行せんとして立たんとせり、又立つことを喜ぶ。未だ明瞭に知ることなければども各人を判別するを得。又異なる音調によりて其意味異なるを知る然れども此の判別の力は余程以前よりあるものなりと推せらる。蓋し此力は一般の言語の本能的知識及び幾分かは生物の躰制及び組織に屬するものなるべし。

第七月。此月中に觀察し得たる事實下の如し。三月十四日に於て幼兒は分明なる音を出し、同様なる音を繰り返せり。母親が「ま」なる單音を發せしに、其口を熟視して其音を繰り返さんとせり。又發音なし易き語を聞けば、繰り返さんとするが如くに唇を動かすを見たりと云ふ。』  
第八月。「ティーデマン」氏は幼兒が知れる人に向ては特に親む所ありと云へるは、少しく遅れたる觀察なるが如し。其證として附加して曰く、偽りて母親又は乳母の鞭撻せらるゝが如くせば、幼兒は之を見て泣け

り。されば若し他人か或人を鞭撻するが如く扮するものあらば之を見て泣かさるや否や。余は惟ふに、幼兒の流涕するは單に自然の同情性より生ずるものとして説明せば可ならん。又「ティーデマン」氏は、記號と對象との間に聯合のあることを注意し。此の兩者の關係は聯合中最も困難なるものなりとし、動物は稀に之を聯合し、假令つとめたりとて之をなし得べきにわらずと。されども、余は之を以て明かに誤謬なりとす。精神上より見れば動物が砂糖及び肉の觀念と此等を示す語とを聯合するや、幼兒と毫も差異あらざるなり。されども兩者に生理上の差異存せり。其言語は兩者に同様に聞ゆるとも、幼兒に在ては之を摸倣することを得る點に於て、同じからざるなり。分明なる音を發するに必要な判斷及び比較作用の進歩に就ては、「ティーデマン」氏が話さるゝ言語の状態に就て説くが如く、其所説正當なりと云ふ可し。されども、其等の能力は吾人が聞き得たる言語を理會するにも必要な



るものなれば、八ヶ月以前に於て既に活動したるに相違なきなり。八ヶ月五日に「テイデマン」氏は觀念の聯合は常に増加し、これが複雑なる感覺及び慾望を生ずることを記載せり。其證據として曰く、幼兒は母親の膝上に他の兒童が戯に措かれるを見て、怒り、是を嫉みて膝上より下らしめんとす。此と同様なる事實は、此れより以前に見らる可く、三ヶ月目或は三ヶ月半頃に於てすら認め得可きなり。

第九月、幼兒が新らしきもの、又は奇なるものを見たる時には他人の注意を之に引かんとして其を指示し、且つ「わゝゝ」と叫ひしを以て「テイデマン」氏は思考作用の明白なる記號なりとし、辨別力の成長せしものなりとせしのみならず、相互に交通せんとする慾望が如何に深く人心に存するかを注意するを得たりと云へり。これこの肝要なる時期に於ける僅少なる觀念なりとす。

第十三日、此の三ヶ月の間新事實に付て觀察を欠きしは、大に遺憾の

事なりと云ふべし。如何となれば、話すこと、歩むこと、并に思考、感覺、意志の能力の最初の進歩は、此の時期に觀察すべき大なる材料を供するものなればなり。十三ヶ月の中旬に於て觀念益明瞭となり。運動愈複雑となり、言語を知ること多し。「水呑を見れば其方に行き、疲勞すれば搖籠に向ふ善く物慾を満すに足るものを辨別し、此が爲めに四肢を用ゆること巧みなり。精確なる意味を含むにあらざれども、故らに或音を反復せんとす。既に腰を曲げよ、蠅を逐へよ等の語を理會して、確に其命令を實行す」と云ふ。此の月の觀察は特質あるものにもあらず、又豊富にもあらざるを知る可し。

第十四日、此の時唯一の事實のみ觀察せられたり。「小兒は未だ高所より落下する考なし。又空間の充足せると、然らざるを考ふることなし。されば、高處より自ら墮落せんとすることあり。(此の如きは飛躍飛翔に慣れざる動物のなす所なり、屢々「ビスケット」を牛乳の中に入



れんとして外に落すことあり。(是れ恐らく不器用なるが故なる可し。又距離を計ることの不精密(全く欠けたりと云ふにあらねど)によるなるべし。

### 評批の察觀童兒

第十五月、復唯一の觀察のみ。「小兒自ら或事をなせし時假令玩具を動かせし時には喜色面に漲れ之を反復して快となせり」と云ふ。「テイ・デマン」氏はこゝに人性の活動及び個性の最高度のものありとせり。同様なる事實は若き動物に於て見るを得るなり。彼等は自身の腕力と熟練の發達とを喜び、多少高慢するに至る。次の觀察は之を證明して余りあるものなり。即ち曾て他人になさしめしことを親らなして喜び、自ら食事をなさんとし、衣服を着し、顔を洗ふにも他人の助くることを欲せざるなり」と云ふ。

當時感情の複雑となりたる表號を見るなり。「他愛自愛の情次第に發達して名譽心となれり。十一月十日愛情の表號として握手せんとし

たるに、其手を出すことを拒みければ泣けり。又自ら悪しきことをなせりと知れば、明かに憂ひを顯はすなり。

### 評批の察觀童兒

第十六月、十一月二十七日種々なる語を明白に發音し、且つ其意味を知れり。假令へばはまんの如き是れなり。されば誰れを呼ぶにも用ゆるにはあらざれども、何事をかあらはさんとするにあらざして、むしろ偶然に發するに庶幾し。されど、又少兒には意義の存する語あり。例は ha-ha の如き是れなり。「抑もハなる音は驚駭に對する反射を自然に發するか如し。是れは一旦壓迫せられたる呼吸が俄かに吐出せらるゝによりて生ずるなり。其呼吸が壓迫せらるゝは奇妙なる事柄が意外に顯出せしより觀念の進行を阻塞せられ、急に他方に轉するが故なり」と。此生理的説明は恐らく價值あるものならん。其確實なることを證するも亦難からず。小兒の機關未だ充分なる練習を欠くを以て、口に言ひ難き長語は擬態を以て補ふなり。此の種の表明は



觀ることを得べし是に由て心中に於ける觀念成立の工合を察するを得可く、加ふるに個人に於ける想像力發生の端緒を認むることを得るなり。例へば、汝の身長如何と問はるれば、手を舉げて之を示せよと、教へられし後に、「グランドマンマ」と發音せんことを求むれば、「グランド」と云ふか困難なるにや、手を舉げ且つ、「コンマ」と云ふなり。「此月の半頃圖を見ることに慣れ、圖畫を見るを好み、縮圖に示されしものも、自己の見慣れしものは延大して見ることを知るなり。

第十七月、同情自愛の念益發達し、或は彼の遊を見て笑ふものあるとき、或は彼を賞賛する者ある時は喜色あり。加之、彼は既に獨り歩み得るを以て種々なる態度に仮扮して他の笑を買はんとす。滑稽を弄せんとするの傾向は、曾て「デアウキンの注目せしが如く、又余が示せしが如く、是より以前に見るを得可し。又「ティーマン」氏が此の時期に記載せる他の進歩は、是より以前に見得べきものならん。即ち種々なる言

語を摸倣すること、例令へば「取れ」と云ふが如き意義ある語を話すこと、已知の場所を指示すること、自影の鏡面に映ずるを知ること、語尾は不明なれども語句を摸せんと務むること等是なり。

此の時に於て益新事實に注意し、且つ之を分解的に見るなり。多くの語句を理會すれども、自ら之を用ゐることなく、他人の賞讃嘉納を得んどの慾望を増加せり。

第十八月、光線殊に月光、又は室内に射入する太陽の光線が生ずる快感に付ての記録を、此の時に見るは、敢て驚く可きことにあらざるなり。

第十九月、言語上の進歩を示せり。種々なるものを見て其名を呼べども、綴音の數多き名詞は發音すること困難なり。終りの綴りと、張聲すべき綴音のみは、通例發音することを得るなり。「子音 Z, Si, W, Si, Sp, 或は二重音は發音すること困難なり。P, T, K, の如き子音は發音なし易



評批の察觀童兒

きものなり。「個性の發達せることは、自ら困難なることを成さんとするを以て明かなり。例令へば或狹隘なる一隅に身を倚せ或は危険なる場所に身を置き、或は重きものを運ばんとすること等を以て知るべし。

此の如き觀察并に前數ヶ月のこれら觀察の價值大なるに従て、益々「テイデマン」氏の論文中にかゝる事實を載すること少きを恨とす。

第二十月、彼は既に二綴音の語を發音し得可し、身體の外部は殆んど知らざることなく、他の小兒は猶早く之を知るなり、室内に於ける物品の名を知れり。

第二十一月、記録なし。

第二十二月、彼は動詞と主格とよりなれる句を作らんとして數語を共用せんとす。されども常に命令法及び一格法の代りに不定法を以てし、冠詞は全く脱せらる。「テイデマン」の習ひしは獨逸語なるを忘

るべからず自ら汚すを耻とし、如何にして之を清むるかをも知りしが、未だ不潔を避けんが爲め、十分に身體の機關を支配するには至らざりき。「嫉妬と驕傲とは漸次發達し、妹が抱愛せらるるを見れば、自らも亦抱愛せられんとす。又妹に與へられしものを奪はんとし、加之、妹を鞭撻せんとすることあり。此の僻は全く此時代の特性なり。三四歳の頃にすら之れ有るを見る。

第二十三月、「テイデマン」氏は一事實を記載して記憶作用の熟練に基くに外ならざるものとなせども、余は是裡に道德心の發生するを認め得るなり。蓋し小兒の道德心は曾て自らなせしこと、及び他人によりてなされたることより、概括して得たるものなり。

七月廿日、一室に來れるに、これ數週前彼が汚せるを以て罰せられたる處なりき。彼直ちに曰く、室を汚すものは鞭撻せらるると。

小兒が服従したる法律を他に應用せんとする傾向は、余の記憶により



て亦確かむることを得。余會て暖爐上に於ける皿に觸れしめざる爲めに、厨房にて暫らく小兒を監督せることあり彼を膝上に置き、故ありて壺の蓋を取りしに、彼は直ちに膝より下りて、命令の口調を以て余に謂ふやう、之に觸るゝ勿れ、これ晚餐の備へなりと。かくの如く主客位置を轉せしことありき。

第二十四月、鴨及び馬鈴薯等の語よりなれる記憶聯想に關し、茲に注意せられたる進歩は、余を以て之を見れば、余り要なきものなり。之比すれば、次の觀察は一層價值ある者なり。「如何に此の小なる腦中に自力を以て種々の觀念を起し、此を整列するかを示すものなり。」會て小兒は雷雨の爲めに小女が殺されたるを聞けり。其を話せし人の風姿態度が大なる感を與へしものと見へて、或時このことを自ら反復せし時には話に交ゆるに當時其話を聞きし時に居らざりし人には解し難き顔色をなせり。

此の月の末、彼は會て一向意に介せざりし。妹并に犬を益々愛するに至れり。余は最初彼の妹を嫉みしことありしは理會し得れども、此の時代の小兒并に此れより若き小兒が、始めより動物に付て趣味を有せざること、は信じ難きことなり。

二年より二ヶ年半に至る間、彼は食物を取らんと欲し、食臺に密接せんと計り、口實を設けて食臺上のものに達し得可き椅子に坐せんとす。「テイ・デマン」氏はこれを以て動物に見ざる思考及び推理なりと云へども誤れり。「彼が欲せしことを妹がなさいる時には、馬鹿と呼へり。」「テイ・デマン」氏曰く、既に自己に對する他者と比較して彼の自愛心のあらはれたるなりと。されど、彼は未だ此の言語の意味を正しく理會し得ざりしにはあらざるか。彼は會て自己に使用せられたる言を摸倣し、自己の不満足を示さん爲め、機械的に之を繰り返すものにはあらざるか。



評批の察觀童兒

小兒は妹が自己の椅子に寄り、又は自己の衣服を着するを欲せず、皆自己の物なりと云ふ。「所有の觀念漠然として顯はれたり」。されども、自己の物品に觸るゝことを欲せざるも、妹の所有物は直ちに之を奪へり。

身を飾り、衣を新にせし時には、自ら之を賞し、他人にも賞せられんことを欲す。妹の生れし時は不快の色あり。母の膝上に在り、又彼の寢床に臥す時は、妹を打たんとす。如何となれば、從來専用せしものを奪はるゝを以て、不快なるが故なればなるべし。この觀察は正當なりと云ふ可く、此の時代、又は後來にありては有り勝ちの事なり。曾て三才の小兒ありき、弟あらんことを願ひ、之を愛する仕方までも語りき。左る程に、弟生れしに、兩親の注意、撫愛、之に向ふを以て、弟を嫉むこと甚しく、弟は速かに死せざるかと母に問へりと云ふ。

此頃、ダーウキン氏の語れる事實と、比較し得べき同様なる事實をあら

評批の察觀童兒

はせり。且つ之は小兒の心を察するに、重要なる暗示を與ふるものなり。「小兒は砂糖の小塊を掴んで人に隠し見付られざる一隅に潜めり。何をなすかは知らされども、小兒の居らざるを怪みて探せしに、小兒が砂糖を食するを見たり。動物に在ては、一度食を窃みて鞭撻せらるれば、再び掠めし時には、忽ち逃くるなり。是れ鞭撻の聯想生すればなり。然れども、上述の小兒は未だ嘗て罰せられたることなければ、同理を以て論し難きなり。而して若し彼が発見せらるれば、直ちに奪はれ、然からずは食するを得と云へる反省に據るものならざる可らず。

小兒が雲を虹と誤りし時に、虹にあらずと云ひしに、今虹は眠れるなりと云へり。又時計を耳邊に接せしめしに、其音を聞きて、小犬が其中に閉込めらるゝなりと云へり。此等は小兒に與へられたる例證を模倣せるものにして、輕率なる推理、及び比論によるものなり。

太陽を見ざる時は小兒は曰く、太陽は寢に就けり。明日起て茶を飲



兒 童 觀 察 の 批 評

み、パン半酪を食せんと。「テイデマン」氏は曰ふ。此等の判断は小兒の反省によるものなりと云ふと雖ども、此れは太陽が寢に就くてふことを教へられたるものが發達したるにはあらざるなきか。余は惟ふに小兒が斯の如く、無生物を生物視するに至るは、大部分は教育の働きの如何と吾人の譬喩的言語を用ゐたる結果なる可し。

二ヶ年半に至て道徳心は明に發達せり。「小兒は他人の非難稱賛に顧みざることなく、彼が幾分かの善をなせりと信すれば、自ら曰く、善き小供よと人は云はんと。彼が悪戯をなせし時に隣人が見るごと云へば直ちに止めたり」。吾人は賢明なる観察者が必要にして、而かも知られざる兒童の道徳心の發達に付て、尙多くの観察を集めざりしを以て遺憾とす。されど、最良なる観察者すら、なほ他者に向て観察すべき事項を遺す所多かるべく、「テイデマン」氏が記載せる例證、及び観察は反對説を提起し、之を主張せんとする人によりて研究せらるべきなり。(畢)

明治三十二年十一月十四日印刷

明治三十二年十一月十七日發行

定價金貳拾錢

譯 者 教 育 研 究 所

發 行 者 須 永 和 三 郎

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

印 刷 者 沼 尻 爲 作

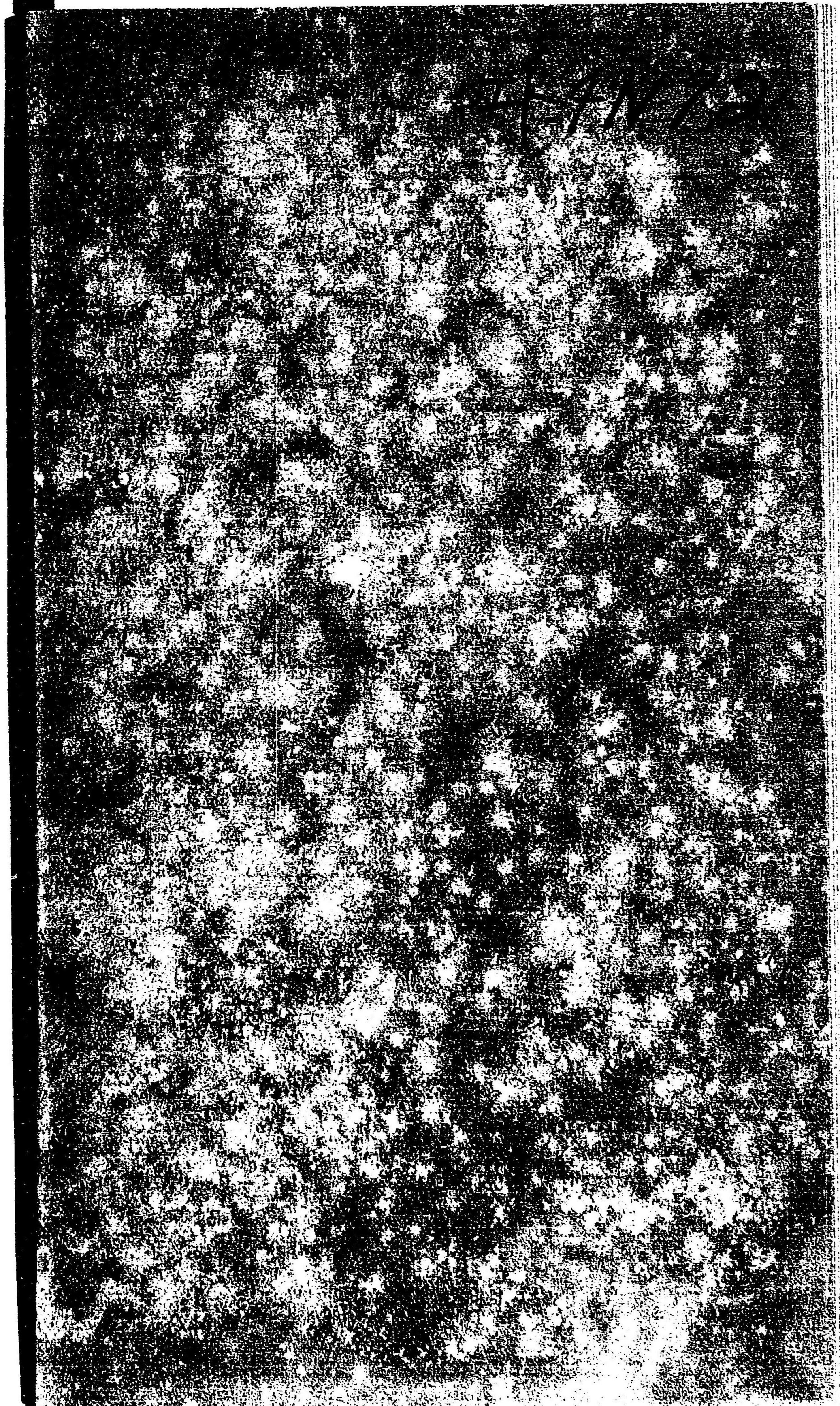
東京市下谷區徒士町二丁目十六番地

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

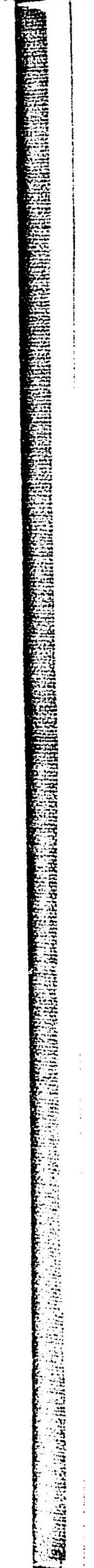
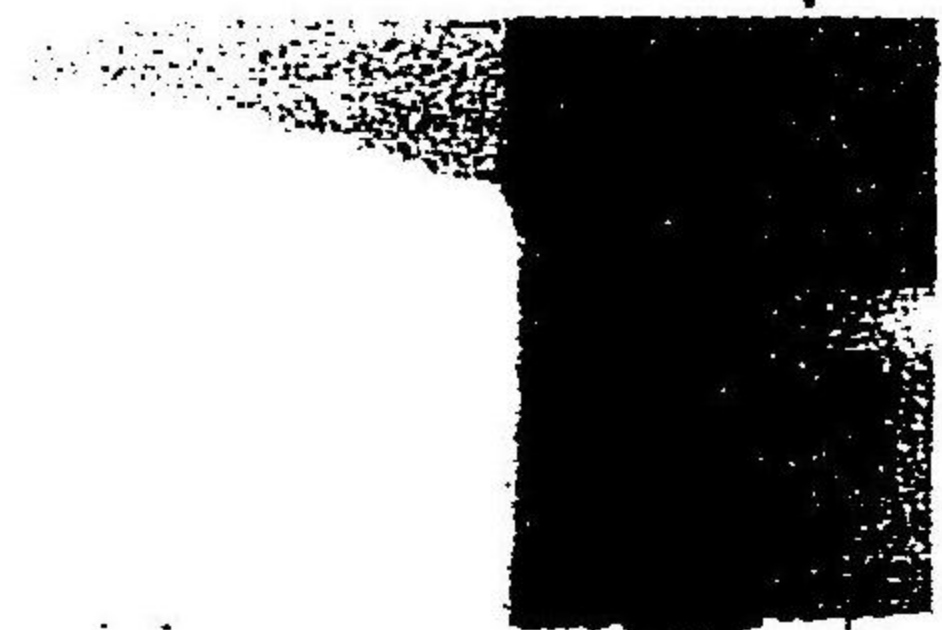
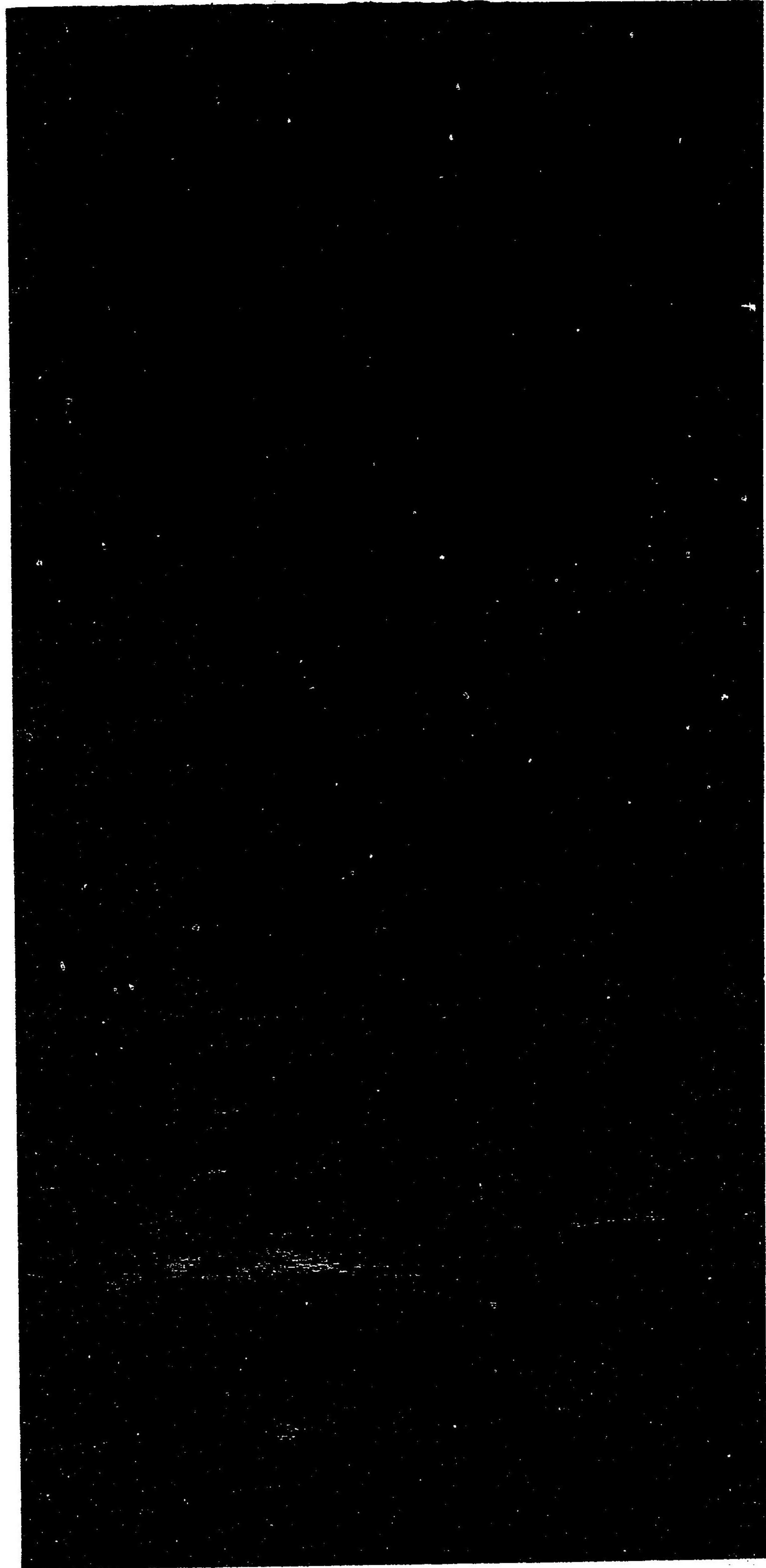
發 兌 元

右 文 館

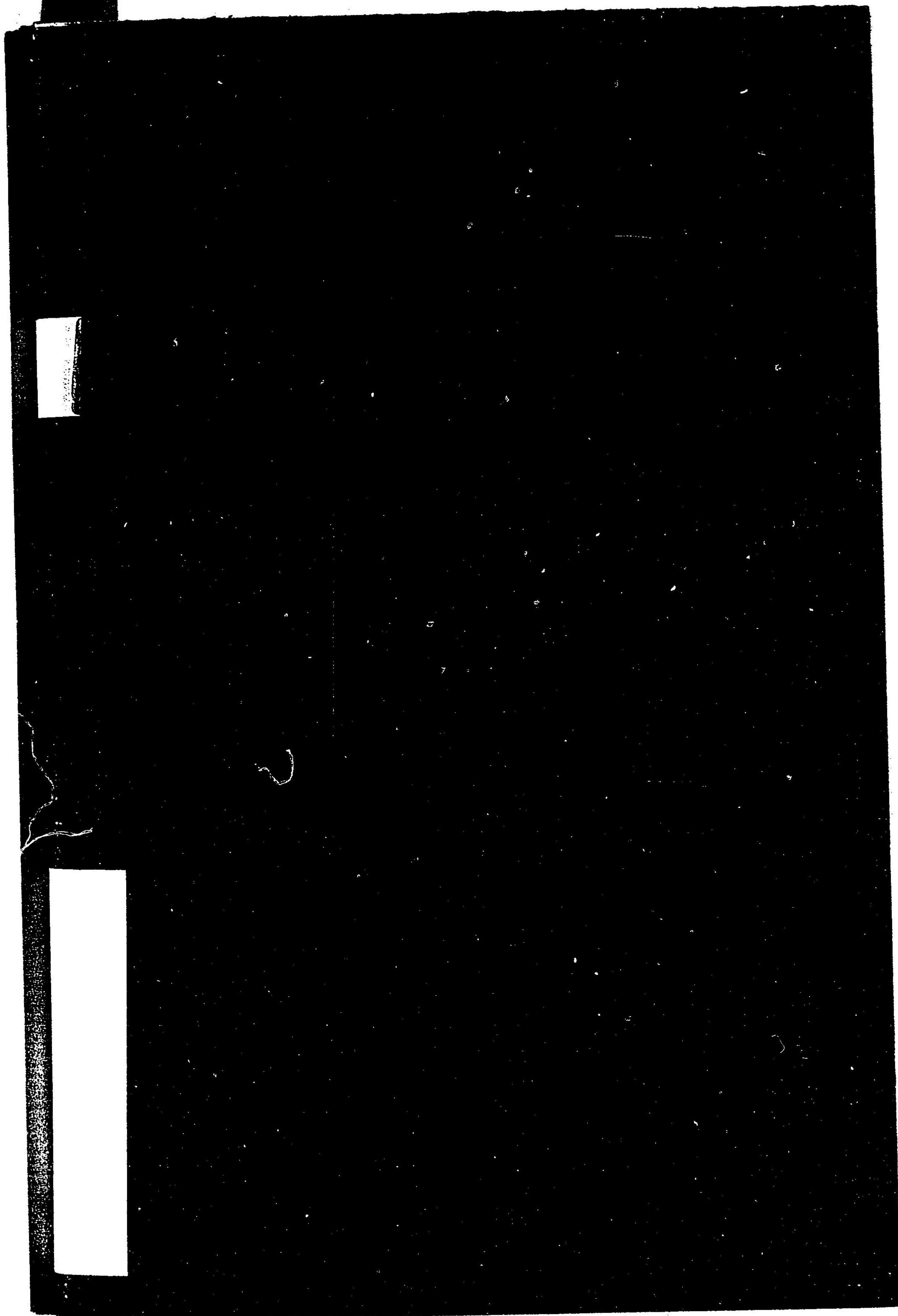














252.5

6

禁複写

兒童研究文庫I

兒童觀察錄及其批評

国立国会図書館

046126-000-2

252.5-6

ティーデマン氏兒童觀察錄及其批評

教育研究所/訳

M32

BEB-0068





